

# 幻想 エロトランプ 敗北エロ合同

エロトランプ、催眠、徹底陵辱  
催淫、快樂墮ち、異種姦、触手

成人向

表紙：背徳漢

# 幻想 ダンジョン敗北エロ合同誌

触手、強姦、陵辱、調教  
媚薬、催眠、異種姦

エロトラップが大量に仕掛けられ

女を捕食するモンスターが徘徊する

危険なダンジョン。

実力に自信がある女が、自分だけは不覚をとる  
はずがないという不確かな自信とともに潜る。

しかしそれは女にとつて肉の地獄への片道切符  
媚肉目当てにダンジョンが牙を剥く。

# ダンジョン敗北エロ合同 目次

背徳漢 神子 痺れ矢ゴブリン屈辱レイプ

ぽし 依姫 ならずもの穢れ白濁汁中毒  
ザー汁懇願強制改造調教

やまいそ 早苗 媚毒スライム全穴改造

miya9 慧音 超強力媚薬浣腸我慢勝負

西寅 ナズーリン 触手拡張姦 全身貫通

平 影狼 プライド粉碎 強制濃厚売春奉仕

三割引 レミリア 触手毘腹ボコ調教

パチュリー 異種姦快樂墮ち

flanzia にとり 超強力淫具 屈服実験

やむっ オークの快樂調教に陥落

小悪魔 売春宿で濃厚娼婦売春

キャンベル ぬえ 雑魚敵輪姦屈服陵辱

議長 うどんげ 触手快樂に陥落

けん 文 媚薬触手無様アクメ完全屈服

はたて 公衆便所扱いプライド粉碎陵辱

パンダイン お隣 反抗的ペット 躰調教

瀬上大輔 全身性感帯改造 触手地獄

咲夜 改造済み敏感ボディ輪姦調教

うがつまつき 絶頂我慢30分耐久勝負  
薬漬け徹底輪姦ハメ潰し  
リグル 禁断症状クスリ哀願肉便器生活

パルスィ 性感帯強制開発スライム姦  
青ばなな 勇儀 触手無様連続アクメ 屈服

にゆう 幽香 催眠罠 絶対服従 恥辱ショー  
霊夢 完全服従催眠 公開無様輪姦

是乃 依神姉妹 ミミック罠触手捕獲調教

8000 感度数十倍媚肉 絶頂禁止責め  
サグメ 強制絶頂禁止 クスリ懇願SEX

秋 陥落済み 奴隷娼婦 淫乱奉仕売春  
栞 娼婦売春 種付け懇願 騎乗位奉仕

chin 催眠済み女賢者 セックス調教  
紫 連続アクメ 極上媚肉屈服調教  
連続種付け 女賢者精神完全屈服  
完全奴隷化 オナホ便器ライフ

はなうな 触手完全拘束 性感帯の敏感化  
華扇 肉体全身 快楽器官化改造  
賢者頭脳快樂漬け  
触手専用穴玩具化徹底調教

背徳漢



神子 敗北ゴ布林陵辱（麻痺行動不能、媚薬発情中）

「けひゃひゃひゃ、痺れ矢尻にハマるとはざまあねえよなあ！」  
神子は気丈に周囲を囲むゴ布林を睨みつける。

すでに服は剥ぎ取られ、ゴ布林達の前には神子の引き締まっ  
てはいても女らしい肉付きをした白い肌が露わになっている。シ  
ミひとつない白さは新雪のような無垢さを思わせた。

柔肌にゴ布林達の下品で好色な視線が突き刺さっていく

「くうっ、くそおっ！ 見るなッ、見るなあああ！」

緑鬼達の視線に羞恥を感じた神子は捕まれた腕を振り払おうとし  
たが、渾身の力を込めたはずの腕は少しも持ち上がらなかつた。

「ちっ、まだ動けんのかよ。もう一本入れときや大人しくなるか」

ゴ布林は落ちていた矢を手にとると乱暴に神子の腕に突き刺す。

矢尻に塗られた麻痺と発情をもたらす強力な毒成分が神子の血  
管に入り、体を巡り肉体が毒で冒されていく。

神子の両膝を掴まれ、ぐいっと大きく開かれると純白の下着が  
露わになった。ゴ布林達はなんの遠慮もなく、そこに指を伸ば  
していく。神子の性感帯を弄る緑色の無数の腕。それはさながら  
白い砂糖菓子に群がる緑色の大型蟻のようだった。

部屋には己の子種汁を流し込むべく、ゴ布林が神子を囲み、  
まぐわうべく列をなしている。隅でたつぷりと白濁液を吐き出し  
終え、満足そうに休憩するゴ布林たちもいるが、その多くはま  
だ神子の極上の肉体を貪ることに満足していないようだ。

発情した緑肌種の汗の臭いそのものにオスを高ぶらせ、女を狂  
わす効果があり、周囲は異様な雰囲気立ち込めている。

神子の上で小柄なゴ布林が緑色の肌をスコスコと振り動かす。

ゴ布林が腰を動かすたびに神子の蜜壺から肉傘により精液や愛  
液が掻き出され神子のマントに汚らしいシミを広げていく。

痺れて緩んだ膀胱から吹き出した小便のアンモニア臭と、性臭  
がたつぷりとしみ込んだマントはたとえ洗おうとも二度と恥臭は  
消えはしないだろう。ドロリとした液体がたつぷりと浸み込み汚  
され尽くしたマントは今の神子の精神のようだ。

「中出しするぞっ！ おおおおっ、いいっ、いいぞおおおっ！」  
神子の上に覆い被さったゴ布林が限界に達し咆哮する。

びゅくりびゅくりと大量の精液が神子の膈内の最奥、子宮めが  
けて流し込まれる。弱い生物ゆえの生殖力の高い精子が、獲物で  
ある神子の卵子を蹂躪すべく泳ぎまわる。

「オラッ、孕めっ、孕めっ！ 俺の精子で妊娠させてやる！」

ゴ布林は肉竿の根元まで神子の中に肉棒を埋め吠える。

この女を俺のものにしてやる、俺のちんぽを忘れさせなくして  
やる。その強い意志のもとに女を所有物に墮とすべくゴ布林は  
最後の一滴まで強烈な悪臭を放つ精液をびゅくびゅくと流し込み、  
神子の膈内をザーメンマーキングしていく。

「いやああ…… うああああ…… もうやめへえ……」

神子は指一本動かさないながらも、その副作用ゆえに敏感になっ  
た膈内を精虫が我が物顔で泳ぎわ回るおぞましい感触に歯をカチ  
カチと鳴らしながら震えた。しかし舌が麻痺し、抵抗も拒絶もで  
きず神子は子宮で精液を受け止めることしかできない。

ようやく射精し終わったのかゴ布林は肉棒を引き抜いた。

ブチュリ、と名残惜しげな音を結合部が立てる。もちろんこれ  
で終わりではない。いきり立ったものをぶら下げた次の番のゴブ  
リンが現れる。

強烈な種付けの意思を秘めた肉槍が秘裂に再び押し込まれた：



アハハハ

ぽし

依姫 精液中毒改造中（精液中毒刻印、改造触手寄生中）

ごぶっ、びゅるっ、どぶぶっ びゅぼぼっ、ぐびゅるるるっ  
依姫の膣内で男の亀頭が何度も膨らみ、そのたびに膣内に熱い白濁マグマが肉棒の先端から噴水のように吹き出していく。

精液。子種汁。女を孕ませ、子宮を汚染し、否応なく男の所有物に作り変えるオスの汚濁液。依姫の神聖であるべき膣内、その最奥の秘められるべき小部屋に、男の欲望が流し込まれている。「かー、射精した射精したあ。姫さんのマンコ、最高だったわ」男は満足げに言うと、肉棒についた精液を依姫の白い太ももに擦りつけ、衣服でぬぐった。最後に太股に筆で横棒を書き加える。穢れ。穢らわしい地上人のおぞましい汚液。依姫の背筋が悪寒にゾクゾクと震える。地上の穢れた民、その中でも最も質の低い、ゴロツキ同然の男が自分の体を好きにしている。あまつさえ強姦さえ行い、精液を何度も何度も己の中に流し込んだのだ。

許せない、許されるはずがない。このような身分の低いものが、月の姫たる自分の体を貪り、誰が父親かもわからない無責任な子作り行為を好き勝手にするなど。依姫は頭が怒りで白くなる。

だが。肉体の反応は正反対のものだった。膣内に肉棒の脈動を感じるたび心が甘く震える。どぶどぶと流し込まれる精液で満たされるような充足感が腰の奥を蕩かしていく。溢れ出た精液が太ももを汚しながら垂れ落ちる感覚に腰がガクガクと震える。

聡明な依姫の頭脳はその原因を理解していた。壁から這い出た蛸のような触手。それが尻穴に潜り込み、何度も執拗にゴシゴシと直腸の襲のの一つ一つを愛撫しながら全く飽きもせず擦り込むように分泌液を粘膜へ吸収させている。

この粘膜摂取させられた悪魔の媚毒が、自分の肉体を狂わせて

いるのだ。男の性臭を嗅ぐたびに頭がグラグラと揺れる気がする。欲しい、もっとと味あわいたい。極上の美酒の味が忘れられないかのように子宮袋はさらに精液を飲み干したいと訴えている。

「おおっ、依姫ちゃんのおまんこっ、いい具合だねえ」  
次の男はたるんだ腹とハゲた頭を持つ中年男だった。

男は無遠慮に依姫の胸と尻を手で楽しみながら腰を依姫に叩きつけている。ぐちゅっ、ちゅぶっ、じゅぶぶっ。醜い中年男に嫌悪を感じる依姫の心とは裏腹に、蜜壺は新たな精液を恵んでもらうべく精一杯の奉仕で男の肉棒をもてなす。今まで抱いたこともない極上の美女の最高の肉穴は男をすぐに高ぶらせる。

「おおおオッ、射精るっ、依姫ちゃん、膣内射精するよおっ！」  
男は雄叫びをあげた。カリ首が膨らみドクドクと凶暴に震える。

びゅるっ、びゅるるるる。大量のぷりっぷりの精液が依姫の神聖なる場所へと流し込まれる。大量の熱が自分のナカにどくどくと出されているのが分かる。精液の熱さが依姫の常識や矜持というものを灼き尽くしていく。男は依姫の頭を掴むと乱暴に唇を奪う。舌を絡ませ味わうような、最愛の恋人同士のような口づけにも、膣内射精の快楽に酔いしれる依姫は従順に従った。

「んっ、じゅぶ、じゅるるるっ♡ ちゅっ、んむちゅう♡」  
加齢臭のする唾液を飲み干しながら依姫は熱心に舌を絡める。

精液を流し込まれるたびに依姫は驚くほど男に従順になり、されるがままにどんな行為にも応じるようになっていた。

触手が作り変えたものは直腸だけではなかった。触手は柔らかい直腸から依姫の体内に寄生体を送り込み依姫を内側から作り変え始めていた。肉体、快樂神経、脳。一度作り変えられてしまった依姫の体は二度と元には戻らない。触手の栄養源である精液を搾り取るために都合の良い宿主に依姫は墮ちつつあった。



ぽし



## 依姫 精液中毒熟成中（精液中毒刻印、精液発情体質）

肉をより上質なものにするために、「熟成」を行う場合がある。依姫の場合、「熟成」とは精液漬け調教と性交へのお預けだった。

白濁の滾りが勢いよくグロテスクな砲身から放たれる。

どびゅっ、びゅるるるるうっ、と依姫の服に粘ついた汚液がかり、どろおりと汚らしいシミを広げながら垂れ落ちていく。

男が子種汁を勢いよく放った事で、最上質の絹糸のような依姫のサラサラの髪にも精液がかかった。ドロドロの汚濁がゆっくりと垂れ落ちながら女の命と言えるサラサラの髪を穢していく。

全身をもわっと匂い立つほどの精液の青臭い異臭に包まれながら依姫はただされるがままに全身で精液を受け止めている。抵抗の様子などなく、むしろその顔には満足げな笑みが浮かんでいた。髪よりどろりと垂れ落ちてきた精液が、依姫の白い顔に粘ついた化粧を加えながら形の良い顎へと垂れ落ちていく。やがて白濁粘液は顎から蠱惑的な鎖骨の窪みへと垂れ落ち、依姫の柔肌を堪能するようにゆっくりと体の曲線に沿って垂れ落ちていく。

やがて粘っこい精液は胸奉仕によって吐き出された精液まみれの柔らかい双丘の間へと垂れ落ちていった。依姫は肌を伝う精液の感触に酔いしれ、腰の奥の熱を持って余したかのように太ももを切なげに擦り合わせる。物足りないと言わんばかりだ。

依姫がここに来てから3日が経過している。その間にも休みなく尻穴をグチュグチュと勤勉に掻きまわし続ける触手がたつぷりと直腸粘膜に塗り重ねてきた媚薬、男たちによる執拗なザーメンマーキングがすっかり依姫の思考回路を侵食していた。

おぞましい射精の感覚と尻穴から拒否権もなく流し込まれる快楽と媚薬の悪魔的効果が化学反応を起こし、依姫の価値観をすっ

かり書き換えていた。今の依姫にとって精液はタチの悪い麻薬のようなものだった。もはやこれなしでは生きられない。欲しい。気持ち良くして欲しい、もっと味わいたい。

依姫は秀麗な鼻筋から再び垂れ落ちてきたどろりとした精液に、ピンク色の舌を伸ばす。精液を舐め取り、舌の上でゆっくりと転がしながら味わう。舌の上に官能の味が広がる。やがて白い喉をコクリと鳴らし飲み干した。素晴らしい満足感。

やはり精液を舌で味わえば、肌にかけることとは桁違いの愉悦をもたらす。わずかな満足が精液への飢餓感を刺激した。欲しい。もっと精液が欲しい。依姫の子宮がみつともなく喚き散らす。自分にもそれを飲ませて欲しいとそう言っているのだ。

舌だけでもすごいのだ。膈内になっぷりと射精してもらったらどうなるだろうか。口とおまんこ、二穴同時なら？ いや、三穴同時に射精されれば狂うほどの快楽が得られるに違いない。

そう気付いた依姫は想像してしまふ。男たちに輪姦され全ての穴を貫かれ、精液を何度も流し込まれることの素晴らしさを。

男達が下品に吠え、野太い肉棒がブルブルと震える。やがて一本が我慢しきれないというように、びゅくびゅくと依姫の膈奥に精液を吐き出す。その熱に堪らず自分が絶頂すると熱い締付けが他の男達の射精の連鎖反応を引き起こす。直腸と舌上におちまけられる精液。想像しただけで期待に気が狂いそうになる。

依姫は、もう自分を抑えることなどできなかつた。

依姫が男たちの「お預け」に屈し、セックスと射精を土下座してまで自分から懇願したのはすぐのことだった。男たちは射精されるたびに獣のように快楽に叫び狂う依姫は、このあと自分が精液狂いの娼婦として売り払われることを知らない。もっとも知ったところでその意味を考える知性など残ってはいなかつたが。



やまいえ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

ゴゴゴゴ

## 早苗 媚薬スライム全身陵辱（強制発情。極度の媚薬中毒）

早苗は昔から可愛らしい動物が好きだった。だから洞窟でスライムを見かけたときも撫でようと自分から近づいた。無力で無害な動物だと判断したからだ。スライムが足の間に潜り込んだことも、子犬がじゃれついた程度にしか思わなかった。そして油断の報いを早苗は自分の肉体と人生すべてで支払うことになった。

「ひいっ、いや、熱い！ これっ、もしかしてえ！」

喰らいつかれた早苗はようやく危険性を理解したようだった。

気づくのが遅すぎた。下着すらもドロドロに溶かしたスライムは眼前の黒々としたジャングルの奥にあるクレバスに目をつけた。

ぐいぐいと自分を処女地に押しつけていく。ちゅぷんっ。いと

も簡単にスライムは己を神聖な場所に潜りこませた。あとは汚液が純白の絹地に染み込むようにドロリと中へと入り込んでいく。

「いやっ、冷たいっ！ 嘘おっ、こいつ入ってきてるの！？」

早苗は驚愕に目を丸く見開く。今自分は犯されている。風祝の巫女として清らかさの象徴である貞操が、こんな得体の知れない物体に奪われるなどあつてはならなかった。

だがスライムはそんなことは知ったことではないとジュブジュブと内側を侵食する。処女膜すらも無痛でスライムに飲み込まれた。侵入は痛みも抵抗もなく終わり、あとは喰らい尽くすだけだ。

スライムの動きが変わる。快樂によって女をドロドロに溶かす方向へと。膣内からチュブチュブと膣肉に吸いつき、舐め回す。スライムの表面上に無数の唇が作られ、そのすべてが早苗の膣肉に喰らいついたのだ。ドロドロと悪辣な媚薬物質を分泌し、膣肉を舐めまわし、快樂の喜びを肉に刷り込んでいく。

「やあああああっ、これえっ！ いやっ、ひあああああっ！」

急変する事態に振り回される早苗の声はもはや絶叫そのものだった。これほど強烈な快樂を流し込まれては頭が狂いそうになる。なんとか逃れようと早苗は全身を必死にバタつかせ頭をめちゃくちゃに振り回す。緑色の髪が踊るが肝心の下半身にはスライムに蝕まれ力が入らず、その場に崩れてしまった。

嘲笑うようにスライム達は目の前の尻穴にも入り始めた。肉付きのいい桃尻にスライムの冷たい不気味な感触を感じる。

「いやっ、いやあああっ！ そこっ、そこはいやあああっ！」

固く閉じた筈の尻穴にスライム達がぐいぐいと侵入を始める。

肛門という本来は排泄専用の穴を逆流される強烈な違和感が早苗を襲う。何かが自分の中に入ってくる。本能的な嫌悪感。目から涙が落ち、嘔吐感すらも感じる。早苗は必死になって尻穴を締めるが軟体生物は全く意に介さないようだ。

だが早苗は苦しんでばかりもいらなかった。すぐにスライム達は快樂を与えるべく直腸にさえも吸い付き始めたからだ。

「いやあああっ！ そんなのっ、お尻はっ、あがあっ、ああアア！」

早苗は天を向き、全力で大声をあげる。尻を吸われ舐めあげられる未知の感覚。もはやその声は意味をなしていない。

チュブチュブ、チュブッ、グチュルルッ。内側から己を吸われる感覚。強烈な快樂で寝付けられ、墮とされていく。絶頂の大渦になすすべなく飲み込まれた早苗は吠えながら絶頂した。

それでもスライムは止まらない。早苗を終わりのない絶頂地獄に叩き落としていく。早苗の白い腹にビクビクと痙攣する腹筋がはつきりと形をあらわす。両の瞳が焦点を結ばなっていく。

洞窟には長い間歇のような吠え声が響き続けた。吠える度絶頂する度餌である魔力がスライムに吸われる。強い力を持つ早苗は良質な苗床として命が尽きるまでスライムに啜られ続けた……。



miya9

慧音 浣腸調教（陵辱一日目。正気度、アナル敏感、未陥落）

ならずものたちのリーダー格と思しき男が敗北した慧音にあるゲームをしないかと持ちかけてきた。浣腸をこの砂時計が落ちるまでの時間、耐えきることができれば自由にしてやる。嫌ならこのままだとも。慧音に勝負を受けた。いや最初から選択権などないも同然だった。数十人の男達に輪姦など慧音は考えたくもない。見世物のように晒された白い尻に男たちの下卑た視線が胸や尻に突き刺さるのを感じ、慧音は見るなあ、と叫ぶのが精一杯だ。「ケケッ美味そうな尻だぜえ。へへっ、それじゃあいくぜえ」

男の一人が、たつぷりと中身が詰まった浣腸器を片手に近づく。大ぶりの浣腸器の先端が尻穴にあてがわれた。グイと先端が無遠慮に菊門をこじ開けると、来る、と覚悟する暇もなく内容液が慧音の直腸へとゆつくりと流し込まれた。

冷たい。それが最初に感じた感覚だった。人肌よりはるかに低い温度の粘っこい液体が自分の穴の中に流し込まれているのがわかる。慧音はそのおぞましい感覚に耐えることしかできない。

ごぷりごぷりと粘液がさらに背徳の穴へと注ぎ込まれる。すでに妊婦のように腹は膨らんでいるがそれでも終わる気配はない。無限にも思える時間の後、ようやく茶色い窄まりからシリンドーが引き抜かれた。慧音の顔に安堵はない。悪寒を感じ奥歯がガチガチと鳴る。少しでも油断すればたちまち決壊しそうになる肛門を慧音は必死に引き締めている。あとどれだけ耐えればいい？ ようやく砂時計がひっくり返された。顔面蒼白の慧音は歯を食いしばり必死に耐えようとする。その間にもギョルギョルと不穏な音が雷鳴のように鳴り響く。限界が近いのは明らかだ。

ジリジリと時間だけが過ぎていく。砂時計の砂は恐ろしいほど

ゆつくりと落ちていき、慧音は唸り声をあげ悶えながら必死に踏みとどまっている。だが悲壮な決意と美しい努力の末はしばしば悲劇で終わる。三十分以上の限界以上の忍耐もついに限界が訪れたのだ。慧音がガクガクと不自然な痙攣を始める。

「いやっ、いやだあああ！ 助けて誰かあ、うわあああああ！」  
ぶぼっ、ぶぼぼぼぼっ、ぐぼぼぼっ。聞き苦しい爆音とともに慧音は尻を決壊させた。中身はほぼ粘液とはいえ人前で漏らしているという限界を超えた屈辱が、慧音の精神を大きく揺さぶる。爆音が鼓膜を、異臭が鼻腔を刺激し、屈辱を増幅させていく。

しばらくの時間の後、ようやく慧音は腹の中のをすべて出し終えた。衆人環視の恥辱の衝撃と解放感がないまぜとなった感覚の中で慧音は荒い息を吐いている。

ぼっかりと口を開けた慧音の菊穴に背後の男が指を伸ばした。つぷり。二本の指が直腸の中に大胆にねじ込まれ、中を攪拌していく。だが慧音が示した反応は抵抗ではなく歓迎だった。背筋を震わせ、喘ぎ、乱れ、ついには指だけで軽い絶頂を迎えた。

「ヒヒッ、あの浣腸液はなあ。性感帯開発型のスライムなんだよ」  
ニヤリと笑った男は言葉を続ける。五分も入れておけばどんな女もアナルセックスの虜さ。それをあれだけ大量に数十分も入れたらなあ。男は嘲るようにに笑った。男の言葉の意味、そして己の忍耐がもたらした結果を悟った慧音の顔は蒼白になる。

さあて、結果を試してみるとしようか。男は振り返った逸物を菊穴に押し付けた。慧音は戦慄する。ダメだ、いま、そんなものを尻穴に挿れられたら。指だけでも絶頂を迎えたのだ。狂ってしまふ。尻穴狂いの痴女に墮とされるのは明らかだ。

尻穴をほじられ、獣のように喘ぎ狂う慧音は男たちをたつぷりと楽しませた……



酉寅

ゴクゴク

ズクズク

ボボ

ズク

ゴク

おーおーおー!!

おーおーおー!!

おーおーおー!!



ナズーリン（触手中毒「二」、触手拡張「三」、触手調教中毒「二」）

どうしてこうなったのだろう。ナズーリンはまとまらない思考の中でぼんやりと考える。宝箱に気を取られて、それで……。思考が瞬断される。ずぐちゅう。尻穴を容赦なく押し拡げる触手がさらに一本侵入したのだ。許容限度を超えた激痛が走った。

さらに痛みが増す。痛い。苦しい。内臓の中で異物が暴れ狂う感覚。手足が跳ね回るが押さえ込まれてしまう。彼女が妖怪でなければとつくに痛みで心が壊れていただろう。

触手は冒険者の魔力を狙う捕食生物だった。痛みで躓け、快樂で手懐け、最後には精も根も絞り尽くしてしまう危険な生き物。触手にとってナズーリンは上質で美味な獲物だった。

ぐぐぐちと触手はナズーリンの内臓の中を掘削する。大腸、小腸、そして胃。執拗な掘削はついに終点へ到達した。食道を通り喉をたつぷり抉った後に口からごぼりと触手が顔を出す。

身体中を埋め尽くし、獲物の体を文字通り貫通した触手は対象の処理を次の段階へと進める。ナズーリンは目を見開いた。直腸の中の触手達から粘っこい汁が吐き出される。今までの痛みが危険なほどの淫らな熱に、急速に置き換えられていくのがわかる。痛みで獲物を発狂させないための触手の分泌液に違いなかった。

「ふううう、うがあああ！ おほっ、おこおおおおっ！」  
ナズーリンの手足がバネ人形のようにデタラメに跳ねる。

粘液を吐きながら触手が体内で体をくねらせ蠢くたびに、猛烈な快樂が湧き上がっていく。こいつはマズい。ナズーリンはそう直感した。そしてそれは手遅れだった。ボコリと膨らんだ腹の中で形がハッキリわかるほど触手たちが激しく蠢くとたちまち激痛が起こり、そしてそれらはすぐに法外な快樂に変換されていく。

思考が快樂に埋め尽くされ、手足から力が抜け落ちていく。

ゴリッゴリユッゴリゴリッ。嫌な音が自分の内側から響く。間違ひなくマズいことになっている。だがナズーリンの頭は理性が焼き尽くされ、思考が快樂の色に染まっていた。痛みは全くない。痛みを悦びに変換するこの触手の分泌液のヤバさをナズーリンはその身で理解させられていた。

触手の動きが変わる。甘く優しく、それでいてえげつない動き。人間には到底不可能な軟体生物ゆえの繊細で目ざとい動き。直腸や内臓全体から甘く狂おしいほどの快樂が流し込まれていく。軽い絶頂を迎え、まぶたの裏で白い閃光が何度もショートする。

「おこおおおおへええ、おほおっ、おごっ、おあああああっ」  
我ながら間拔けな声だと彼女の奇妙に冷めた理性が考える。

プシャッと小便のように愛液が噴き出す。ゴリゴリと尻穴を拡張される快樂に反応し、絶頂したのだ。もうナズーリンには自分の体が制御できなくなりつつあった。触手が首を締め始める。痛みと苦しさが増す。そしてそれらはすぐに快樂に変わる。

痛みと快樂、恐怖と法悦、相反する二つの責め苦がナズーリンの理性と抵抗を容赦なく砕く。飴と鞭で奴隷を躓ける天性の調教師のごとき触手は、法外な効果を持つ媚毒液を分泌しながら獲物の精神と肉体を文字通り従順な肉贖へと作り変えていく。

「おこおおおおっ、おっ、おへっ…… おこおおおお……」  
触手たちに絡め取られた小柄な体が玩具のように揺れる。強烈すぎる刺激で思考を放棄させられたナズーリンは、良質な魔力を搾り取るための触手の家畜に強制的に墮とされていった。

心が壊れてもなお妖怪としての頑健な肉体は、壊れるまでの長い間、獲物を捕らえた触手たちを満足させ続けたのだった。





## 影狼 肉便器売春中（奴隷宣言済、プライド粉碎済）

名声ある冒険者として、誇り高い人狼として、男たちに捕らえられ徹底的に鬨り尽くされても抵抗することを諦めなかった影狼は、その愚かな反抗の代償としてこの牢獄同然の部屋で男たちに奉仕する最底辺の娼婦に墮とされていた。

「オラッ、もつと腰を振れよ！ 便女のくせに何サボってんだ！」今日の客は特にタチが悪かった。傲慢で我儘で無思慮。

肥大した自尊心を満たさぬ周囲への苛立ちが顔に現れた顔には我欲ばかりが浮かび影狼への気遣いなどひとかけらもない。

この肉便器を思う存分獣欲のままにをブチ犯してやる。日頃の鬱憤を晴らしてやる。白濁汁を流しこみ立場を分からせてやる。肉便器らしくたつぷりと使い潰してやるから覚悟しておけオラッ。そんなたぎる劣情が男の顔に浮かんでいた。

「しますっ、しますからっ！ 振ります、便器らしく腰を振ります。だからっ、だから乱暴にしないでくださいっ」

ずぶぶっ、ぶちゅんっ、ぢゅぶぶうっ。ぐぢゅっ、ずぢゅぢゅう。秘穴を締め付け、腰をくねらせ、大きく感じ入ったかのように甘く喘ぐ。感じる演技すべては男を満足させるためだ。どれほど厄介な客でも満足させればそれで終わる。影狼にできることは目の前の男が一秒でも早く射精するよう祈ることだけだ。

グイと影狼の首輪を引かれる。喉が締め息ができない。反射的に締まる膣穴の感触に男が満足げに唸る。肉オナホ同然の今の影狼にはそれでも腰を止めることは許されない。

地獄のように長い時間の後男はようやく射精に達した。

「うああああっ、あひいっ…… 精液が、なっ、中にいいい……」

どくどくと煮えたぎる子種汁が神聖な場所に流れ込む。

火傷しそうな感覚に影狼は絶望的な声をあげる。最底辺の娼婦である影狼には避妊薬などという高価なものは与えられない。もし妊娠すれば。よくて墮胎、悪ければそのままだ。

だが妊娠に怯える影狼に全く気遣いも見せず男は傲然と言う。「おいしい。射精されたら何か言うことがあるだろ？ 便器がよお」

男が傲慢に苛立つ。射精にも奴隷娼婦は礼を述べねばならない。「この影狼に精液を恵んでいただき、ありがとうございます……」畜生。影狼は心にもない礼の言葉を述べる。

こんな薄汚い男の精液を流し込まれて嬉しい女がこの世のどこにいるだろうか。影狼はギリリと歯を鳴らす。

「おいおいおいしい？ なんだか羨がなっていないじゃねえかあ？」男は声を荒げる。憂さ晴らしに囚人を鞭打ちたい看守が格好の獲物を見つけた時のような嫌らしい態度だった。

「うう、ごめんなさい…… この淫乱な影狼のチンポ抜き穴をお使いいただきありがとうございます。精液をお恵み感謝します」怯えた影狼はここにきて叩き込まれた言葉を恭しく述べた。

死んでもそんな言葉を言うものか。そう啖呵を切ったころの気概はもう影狼の中には微塵も残っていない。

「へへっ、影狼ちゃんはこのチンポが気に入ったのかよ。本当にどうしようもない淫乱女だな。それならまた使ってやるよ」

男は好き放題言って影狼を貶めると再び腰を動かし始める。ずぶっ、ぐぢゅぢゅう。影狼もノロノロと腰の動きを合わせた。

四回。溜めに溜め込んだ精液をたつぷり吐き出しようやく男が去った。影狼は上を向いて涙がこぼれそうになるのを堪える。

「どうやら次の客が来たようだ。また乱暴そうな足音の客だ。影狼は早く自分が何も感じられなくなるよう短く祈った。」



三割引

レミリア 触手姦調教中（触手媚薬「ら、触手中毒」こ）

「下等生物のくせにっ！ このっ、いい加減にしろっ！」

カチリ、という機械音とともに壁の隙間から大量に湧き出してきた触手たちが群がろうとするのをレミリアは必死に振り払う。

数が多すぎ既に手足に触手が何本も巻きつき、気色の悪い粘液中で服に大きなシミができていた。こうなったら大技を使ってまとめて吹き飛ばしてやる。レミリアは腕に魔力を集中させ、呪文とともに一気に解き放つ。そのつもりだった。

だが魔術発動の前に口に触手が捻じりこまれた。舌を使って触手を押し返そうとするが、もはや手遅れなことは明らかだった。

魔術抵抗のできなくなったレミリアの秘裂へと大瓶ほどもある野太い触手が近づく。経験のないレミリアにとっては明らかに大きすぎるものが一気に秘められるべき場所へと侵入した。

肉を裂かれるような激痛にレミリアは絶叫しようとした。しかし口を塞いだ触手がそれを許さない。その間に尻穴にも比較的細く生白い触手が侵入した。前後穴の二本の触手は先を争うように細く狭いレミリアの中を奥へ奥へと容赦なく侵入する。

秘穴の太い触手は荒々しくドリルのように掘り進め、背徳穴の細い触手は隙間を探り当てスルスルと潜り込んでいく。大きすぎる異物感に、ガクガク震えるレミリアの瞳が大きく見開かれる。しかし細穴の掘削開発の進みの遅さに業を煮やした触手たちはブルブルと震え始めた。「奥の手」を使う気になったようだ。びゆくびゆくびゆく。先端から白く粘っこい粘液、高浸透性の潤滑媚薬がレミリアの全穴へとぶちまけられていく。

肉体に不可逆な改造効果を持つ白濁液で滑りが良くなった穴へとさらに何本かの触手が潜り込む。ミチミチと音を立てる入り口

をさらに押し広げられる激痛にレミリアはおもわず口内の触手に強く歯を立ててしまった。触手がビクリと震える。

やがてすぐに激しく穴の中を掻き回し始めた。触手たちは激しく蠕動し、攪拌し、掘削し、穴を蹂躪する。レミリアが触手に歯を立てたことへの「お仕置き」に違いなかった。

「んおおおっ!? おほっ、おあああああ！」

許容限度外の刺激にレミリアはくぐもった無様な声を上げる。

目がぐるんっ、と上を向き寄り目がちな三白眼になる。痴呆じみたその顔はかつての威厳など欠片も残ってはいない。

前後の穴に潜り込んだ平たくイボだらけの触手がゴシゴシと膣と直腸を隔てる薄壁を擦り立てる。女が一生味わう筈がない常識はずれの刺激にレミリアは大きく仰け反り悲鳴をあげる。

「壊さないでえっ！ これ以上わらひっ、壊さないでえっ！」  
ついに堪らずレミリアは触手に哀願した。だが無意味だった。

陰核にびっしりと張り付いた細い触手たちは可愛らしい陰核に何度も何度もブスブスと細い針を突き立て媚毒液を注入する。毒液は神経細胞に作用し、そこを強烈な性感帯へと作り変えていた。

よく似た細い触手たちがレミリアの未成熟な胸にも近づく。放っておけばそこも性感帯として作り変えられるのは明らかだった。しかしブラシ触手によってGスポットをシゴき抜かれ、狂ったように吠えているレミリアにはそれを気にする余裕などありはしない。

その間にも膣内に潜り込んだ野太い触手はズドンズドンとレミリアの腹を突き破りかねない勢いでストロークを繰り返し、発情媚薬精液と快樂改造液を流し込んでいる。並の女であれば一晩で廃人になる改造陵辱。しかしレミリアの強靱な回復能力ゆえに、彼女は一ヶ月以上この快樂陵辱地獄を味わい続けたのだった。



三割引

パチユリー（触手媚薬中毒、触手中毒）、異種姦愛好）

「おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ……」

後ろから抱きかかえられ醜い怪物に貫かれながらパチユリーはメスそのものの声で喘ぐ。そこに嫌悪や抵抗の色は薄かった。

痺れ罌の効果が残る体は未だ鉛のように重く、パチユリーは抵抗することもできない。いや、それをいいことに触手怪物はたつぷりと美女の体を貪る。パチユリーの秘部からぐちゅりにちゅりと響く卑猥な水音は、触手の甘い愛撫と媚薬毒に抵抗できぬままパチユリーが屈しつつあることの明らかな証左だった。

「まっ、負けないっ……負けないのっ、こんなのおっ……ッ」  
パチユリーは己を叱咤する。しかしその発音は舌っただらずで彼女の中の明敏な知性が快楽によってグズグズに溶かされていることをはつきりと示している。

顎を掴まれパチユリーは怪物の方へ顔を向けさせられる。生臭い息を吐く醜悪な顔が至近距離に迫り、パチユリーの唇を奪った。

（こ、こいつ……私の唇まで……覚えていなさい……）  
怪物は触手でパチユリーの舌を絡め取ると、味わい舐めしゃぶるようにじゅぶじゅぶと不快な音を立てた。

舌をフェラチオされるかのような心地よさにパチユリーの警戒意識が鈍る。生臭い唾液を怪物が流し込んでも、パチユリーは深く考えず従順にコクコクと喉を鳴らしそれを飲み干した。そしてそれは致命的な誤りだった。燃える。パチユリーが感じた最初のご感覚はそれだった。火酒を飲み干したような喉と胃の痛み。

「こっ、これえ、まさかああ……んひいつ、ひいひい♡」

媚薬。それも超強力な即効性の代物。間違いなく人が摂取すれば副作用や後遺症が残るレベルのものに違いない。

この怪物は間違いなく自分のことなどこれっぽっちも気遣ってはいない。こんなやつからは一刻も早く離れなくてはならない。パチユリーのわずかに残った理性が警鐘を鳴らす。動かぬ手足に力を込め、離れようとしたその刹那。

「んひいひいひいひい！？」おひいつ、これっ、これえええっ！」  
膣内に埋まった触手肉槍が弾けた。いやその表現は正確ではない。肉棒の先端の肉傘に当たる部分の内側から蛸のような触手が現れたのだ。肉棒はより長く、太く、それでいて女を狂わせるためのえげつない形状に変化した。表面の吸盤がパチユリーの膣襞ひとつひとつに吸い付き、舐めまわし、愛撫する。

人間には決してできぬ反則級の快楽。さらに触手怪物は腰を突き上げ始めた。ポコリと腹が妊婦のように膨らむ。膣奥を突かれ、心地よさげに口を開けた子宮口に肉棒の先端の吸盤が吸い付く。

ポルチオ快楽をたっぷり刺激した後、肉棒が引き抜かれる。今度は浅い位置でゴシゴシとGスポットを擦り上げ、吸盤たちがザラザラとした肉天井を舐め上げる。

「こんなっ、こんなのおっ、おっ、おっ、おっ、おっ……」  
パチユリーは髪を振り乱し叫ぶ。汗まみれの顔は阿呆のようだ。

「おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ……」  
獣じみた声を受け何度彼女が昇り詰めても触手怪物は止まらない。それどころかワームじみた大口を開け、パチユリーの頭を飲み込む。逃れられない至近距離から触手媚薬と催淫ガスが浴びせられ、パチユリーの知性がグズグズに溶け消えていく。賢者と呼ばれた女が怪物の苗床に作り変えられていく。

ビクビクと激しく震える彼女の手足は、まるで彼女の知性の断末魔の悲鳴のようだった。



flanvia

にとり 陵辱輪姦中（淫具開発「ふ」、狡猾、淫具快樂中毒）

「ほおら、にとりちゃん。録画してるからカメラ見て笑いなよ」  
にとりを背後から抱きかかえた男が下卑た顔でにとりに促す。

にとりは、控えめに言ってもひどい格好だった。一糸まとわぬ姿をビデオカメラのレンズに大胆に晒している。本来最も秘められるべき女の神聖な場所は男の肉槍に貫かれたまま指で押し広げられ、何度も精液を流し込まれた無残な姿を曝け出している。

にとりが本来身につけるべき衣服は彼女の下に敷かれ、垂れ落ちた精液や、彼女自身が垂れ流した愛液や、訳のわからない液体でドロドロに汚され、酷い異臭を放っていた。

男たちに完全に屈服した、ここまで無様な姿を収めた動画が出回ってしまえば彼女自身の人生と将来が破滅することは確実だ。だがにとりはただ男たちのなすがまま好きにさせている。

「へへへ、にとりちゃんいい感じの便器顔になってるぜえ」

男たちがにとりの知性を徹底的に削ぎ落とされた表情を揶揄し、軽蔑をあらわにしながらどつと嘲笑する。

にとりは曖昧な笑顔のまま、ここに来てから嫌という程叩き込まれた性技で肉棒に対して奉仕を続けていた。そのような浅ましい姿を見れば誰であろうとにとりに対して軽蔑の念を抱くだろう。例外はにとりの肉体に欲情し、獣欲をぶつけたい者だけだ。彼女の人格を徹底的に破壊したのは男たちの徹底的で終わりのない陵辱だけではなかった。女を淫乱に墮とすためだけに作られた悪魔のように狡猾な怖ろしい淫具によって、休みなく徹底的にとりは鬨り尽くされたのだ。

昼間は男たちに輪姦され、夜も淫具をハマられ一晩中朦朧とする意識の中で休みなくイキ狂わされた。絶頂ギリギリを焦らした

まま責め続けるローター、一度挿入すれば気絶することも許さず絶頂させ続ける回転機能付きパイプ。

中でも悪辣なのは身悶えせずにはいらぬほどの快樂を与えながら、身悶えすればさらに激しく直腸を食い荒らすように尻穴快樂を刷り込んでいくアナルパール型パイプだった。

淫具まみれの快樂地獄の中に、何日も逃げ場もなく放り込まれば、にとりでなくとも正気を失い快樂に屈服しただろう。だがこんな女を啼き狂わせるために悪魔的な性能を備えた道具を作るには人間業ではない技量が必要になる。

「へへへ、こいつも悪党だよなあ。女がぶっ壊れるくらいヤバい道具を作ったら解放する、って言ったら本当に作るとはよ」

我が身可愛さに他の女を絡め取る淫具を作ったにとりが受け取った報酬は、手製の道具を交えた我が身へのおぞましい調教だった。

まだ使っていないヤツが一つ残っていたな、そう言う男はゴツすぎる兜に似た道具を取り出した。女の脳に男への絶対服従と完全屈服を焼き付ける洗脳装置。あんな後遺症や副作用おかまひなしの代物を使われたら自分がどうなるか、製作者であるにとりには僅かに残った思考だけでもヤバさが理解できた。

「ひいいっ、許してよおっ…… やめっ、やめてえええ……」

男たちは何の遠慮もなく、にとりの頭をすっぽりと装置で覆った。「やだっ、やだあああ！ 助けてよ盟友、他の事なら何でもするからっ！ 女なら何人でも連れてくるからさあ！」

男はかまわずにスイッチを入れた。女などにとり自身が作った道具があればいくらでも墮とすことができる。交渉は無意味だ。

これがこのあと何人も女たちの人生に決定的なトドメを刺すこの装置の悪魔的な効果を実証する最初の犠牲者に、にとりが選ばれた瞬間だった。





おむっ

## 小悪魔 オーク陵辱調教（異種姦中毒、媚薬精液中毒）

小悪魔を犯すオークの腰使いはただ獣欲のままに勢いよく叩きつけてくる乱暴なものでテクニクと言えほどのものではなかった。ぱちゅんっ、どちゅっ、ぐちゅっ、ずぶぶぶっ。それでもオークは執拗に小悪魔の膣穴を味わい貪ろうと、何度も何度も激しい破城槌じみたストロークを叩きつけてくる。

女の体を気遣うことなく、ただ己の欲望を満たす為の自分勝手な相手をオナホ扱いをする自慰行為。しかし拙速に応える小悪魔の反応は完全な肉悦に吞まれた一匹のメスのそれだった。

「ふううっ、くううう♡ あっ、またっ、またああっ、イクッ♡」

小悪魔はもはや何度目かも分からぬほどの絶頂に再び上り詰めた。

確かにオークのピストンには巧みな性技というものはない。だが何よりも執拗なのだ。生殖のために異種族の女を孕ませることに特化した種族特有の絶倫さ。ゴブリンは先程から何度も小悪魔の膣内に特濃の子種汁を注ぎ込んだというのに衰える気配もない。

そして何より悪辣なのは子種汁の法外な媚薬効果だ。逃げることもできないままに、たっぷりと白濁を注ぎ込まれた小悪魔の膣内は完全にオークの肉槍に奉仕するための都合の良いトロットロの肉オナホに作り変えられていた。

オークがピストンするたびに膣内の襞の間でドロドロしたザーメンが攪拌され粘膜に擦りつけられ、信じられないほどの快楽を生み出し、セックス中毒に墮とすための肉の喜悦を小悪魔の精神に刻み込んでいく。

子作りのために女の理性を吹き飛ばし、都合の良いセックス狂いのチンポしごき穴に墮とすために特化した精液の効果を小悪魔は知性を焼き切るほどの快楽で理解させられていた。

「あっ、いいっ、はああっ♡ 奥をッ、もっとゴリゴリしてえっ！」  
小悪魔は陵辱者相手に媚びる声を上げ、より快楽を得るために自分から浅ましく腰をくねらせる。

オークはニヤリと笑うと小悪魔のリクエストに応える為により激しく腰を動かし始めた。ドストスという杭打ちのような重いピストン。何のひねりもないその行為が、媚薬精液というスパイスと化学反応を起こすことで、反則級の快楽となって小悪魔に襲いかかり、脳を焼き焦がしていく。

そしてオークの絶倫ゆえの執拗さ。たとえどれほど女が泣いて許しを乞おうと矜持を砕き、肉棒に屈し、性奴隷に墮とすまで休みなど与えず執念深く犯され続けるのだ。

こんなものに女が抵抗できるはずなどないではないか。小悪魔の快楽本能が甘く囁く。女を狂わせ、夢中にさせ、所有物に墮とすためにある至高の肉悦。

「おひいいっ、はあああっ、あっ、おへええあぁ♡」  
性行為にハマってしまった小悪魔はトロけた顔で喘ぎ続ける。

ドハマリしてしまうのも仕方がないではないか。忘れていたはずの小悪魔の淫魔としての本能が訴える。こんなに気持ちが良いのなら屈してしまってもよいではないか。

「へへへえ、いい声で啼くじゃねえか。どうだい？オレのモノにならねえか？ 肉奴隷になれば毎日たっぷりハマてやるぜえ？」  
オークは耳元で、蠱惑的な誘いを行う。小悪魔に自分の奴隷になれと言っているのだ。拒絶すべきだろう。女として当然だ。

だが小悪魔の返答は、オークの望むものだった。相手は自分を味わい、己は快楽を得る。互恵的な関係だ。奴隷宣言など手続きに過ぎない。小悪魔は口元に淫らな笑いを浮かべるとペロリと唇を舐めた。彼女は己の本能に素直になる道を選ぶことにした。

やむっ



小悪魔 奴隷娼婦売春中（奴隷宣言済、売春済、淫乱）

「おおおあああつ、くううつ、いいつ。またつ、射精する……」  
騎乗位の小悪魔に肉槍を咥え込まれた男が感極まるように呻いた。  
「うふふふ、いっぱいビュルビュル射精しちゃってくださいね♡」  
小悪魔は己の膣内にびゅるるつ、ぶびゅるつ、と噴き出していく  
精液の感覚に表情をトロかせながら満足そうに息を吐く。

男が精液を吐き出すたびに己の内側に何か広がっていくのが  
わかる。肉穴を使い満足できた、という男からの肉奴隷への最高  
の賛辞としての射精。それを女として最も神聖な場所である子宮  
で受け止めることができるという性奴隷としての幸福。そして淫  
魔として、相手の若い精力を搾り取れる愉悅。

そのどちらにも、今の小悪魔にとっては至上の喜びを感じさせて  
くれた。奴隷宣言のあと小悪魔は所有者であるオークによってこ  
の娼館に連れてこられた。他の女たちと同じように、奴隷娼婦と  
して客たちをその肉体で満足させる、と。

小悪魔がそれを天職だと悟るのに時間はかからなかった。この  
娼館を訪れる女に飢えた男たちは、容赦なしに小悪魔を思う存分  
貪った。手加減なく徹底的に小悪魔を一日中ハメ倒し、何度も何  
度もえげつなく絶頂を味あわせ続ける。

ほかの女であれば限界まで鬨られ尽くされることとなるだろう。  
だが小悪魔は違った。淫魔ゆえの無限の精力で、男たちの行為を  
いくらでも熱心な肉奉仕をもって受け止めることができた。

たちまち小悪魔はこの娼館の看板娼婦となった。

射精を終え、満足げな表情で余韻を味わう男の表情を眺める小  
悪魔は嗜虐的な表情を浮かべた。男の上に跨がったまま腰を沈め、  
男の肉槍の龟头を己の子宮口に密着させる。

「ふふつ、こういうのはどうですか？ やみつきになりますよ？」  
小悪魔の子宮口がゆっくり口を開け、肉棒の先を飲み込んでいく。  
子宮口によるフェラチオ。射精直後の敏感な龟头を濃厚な刺激  
が走り抜けていく。男が情けない声をあげて喉を晒す。じゃあ本  
気を出しますよお、と小悪魔は言った。

子宮口で男の先端を咥えのまま、腰を上下に動かし始めた。膣  
内が生き物のように肉棒を飲み込みながら刺激し精液を搾り取る  
ように蠕動運動を始める。上下に腰が降りたくられ、円を描くよ  
うに尻が踊る。男を飽きさせぬ腰の動きが発射直後にも関わらず  
急速に男の射精感を高めていく。

男がああああ、と悲鳴に似た声をあげた。びゅるるる、と熱  
い肉欲のスープが小悪魔の子宮に入口から直接流し込まれていく。  
子宮内を焼き尽くされる感覚に小悪魔は満足げに笑った。

欲情のブレーキは外れてしまった。坂道を転げ落ちる暴走馬車  
のように小悪魔の興奮のボルテージは加速していく。再び腰が情  
熱的に動かされ始めた。本能的に危険を察知した男が逃れようと  
身をよじるが、小悪魔が今度は体重をかけて腰を下ろしたことで  
男は小悪魔から逃げられなくなる。

男の悲鳴を聞いた娼館主のオークは笑う。小悪魔は人気の娼婦  
だが、やり過ぎると男を死ぬまで精液を搾っちゃうのがタマにキ  
ズだと。まあいい。死んだら男の持ち物を頂けば俺に損はない。

これだ。悲鳴を上げる男を責め続けながら小悪魔は嗤う。チン  
ポでシバき倒されるのも良いが自分で搾り取るのもよい。どちら  
も味わえるここは本当に最高の場所だ。小悪魔は文字通り最後の  
一滴まで男から搾り取るつもりで腰を動かし始めた。

また再び男が悲鳴を上げた。すでに見るからに男はげっそりと  
している。あと何発もつだらうか。小悪魔は舌なめずりした。



キャンベル議長

ぬえ　ゴブリン陵辱中五日目（精液中毒「二」、従属洗脳「二」）

ダンジョンに無数にある地下牢の一つ。そこからは女の悲痛な声と、嗜虐心に満ちた陵辱者たちの声がこだまする。

「へへっ、ナカに射精すぜえ！　父親も分からない子を孕めや！」  
ぬえの暖かい膣穴を抉るゴブリンはそう言うのと、さらにピストンを速める。よくエラの張った凶悪な形状の肉槍で膣壁をゴリゴリと擦りあげ、膣奥に叩きつけ、肉穴を味わう。

膣内でペニスの先端が一回り大きくなるのがわかる。ここに来て望まずとも覚えてしまったオスの射精の前兆。これから何が起きるのかを悟ったぬえは無様な悲鳴をあげる。

「いやだっ、膣内はやめてっ、他のことならなんでもするから！」  
ぬえは哀願するがもちろん聞き入れられるはずもない。

分かってはいても懇願せずにはいられないのだ。どうしてこんな雑魚たちに私が犯されれないといけないの。ぬえの中で理性が叫ぶ。トラップで鈍らされ、仲間とはぐれ、本来の実力も発揮できぬまま倒された。そして今や輪姦陵辱されている。大妖怪ぬえとしての矜持は見る影もなくズタズタに引き裂かれてしまった。

びゅくっ、びゅるるっ、ぶびゅるるるっ。満足げに呻くとゴブリンは射精した。ドロドロとした欲望のスープの熱が膣内に広がる。ぶびゅっ、ぐびゅるるるっ。それでもまだ射精は終わらない。

弱い種族ゆえの絶倫さと生殖能力の強さ。必ず女を孕ませてやるといふ本能的な衝動。女を犯すための狡猾さ。それらは今この場において生贄であるぬえに叩きつけられている。

ドロドロと膣内に精液が注がれ、子宮におぞましい白濁液が染みこんでいくたびにぬえには不可逆の変化が起きていた。

弱い種族が生き延びるための遺伝子に刻まれた特性がある。強

力な催淫作用。他の種族のメスを孕ませねば生殖もできないゴブリンの精液にはそれがあつた。粘膜から摂取したメスはゴブリンに対し反抗心を失い、発情を覚え、本能的な隷属を誓いたくなるよう潜在意識を書き換えられてしまう。

並の女であれば二、三度も射精されれば肉奴隷に堕ちる。いくら大妖怪であるぬえといえどもこれほど執拗に何度も何度も射精されていれば、影響が精神に蓄積しつつある。

ぬえは自覚していなかったが、反抗するぬえの言葉からは先ほどまでのやめろ、殺してやるという命令や反抗の言葉は消え、憎い敵に情けを乞う哀願の言葉に変わりつつあつた。

これ以上されては戻れぬところ、ゴブリンたちの肉玩具に堕ちることは確実だつた。だが監禁されたぬえにはここから逃れる希望はない。先ほどまでぬえの膣穴を味わっていたゴブリンがどくと、すぐに次のゴブリンが秘裂にペニスをあてがう。

「いやだっ、いやだああああつ！　もう許してよおお！」

ぬえの哀願も虚しく凶悪な形の肉槍が膣内にずぶりと侵入した。やがて仲間を呼び、数が増えたゴブリン達が他の穴に目をつけるまでに時間はかからなかった。膣や尻穴はもちろん、口、手、腋、ありとあらゆる場所をゴブリンは使い、従属させるための体液を送り込んでいく。ぬえの態度には媚びすら見え始めていた。

「うああ……　しゃぶりますからあ、せめて優しくしてえ……」  
休みのない陵辱、流し込まれ続ける洗脳精液はぬえの肉体を、そして何より精神を不可逆に手加減なく変化させていく。

お前は女、子を産むための孕み穴なのだ。本能にそう訴えかけるオスの力強い律動がぬえの本能に消えぬ傷痕を残す。お前は精液便所だ、ちんぼシゴキ穴に墮としてやる。燃えたぎるほどの陵辱者たちの獣欲はぬえの価値観を容赦なく書き換えていった……



キャンベル議長

うどんげ 触手部屋苗床調教中（触手快樂中毒「2」）

部屋の床はドロリとした粘液に浸っており、空気には粘液が気化した妖しいもやがたちこめている。生臭くジメジメとした部屋に異形の触手生物によつてうどんげは捕らわれていた。

「うあああつ、ひあつ、あああああ……」

うどんげが甘い声をあげる。その声には数日間休みなく繰り返された触手陵辱ゆえの疲労が滲んでいた。

しかし触手はまったくうどんげを氣遣うことなく、秘所と尻穴に太い触手を何本もズボズボと無遠慮に出し入れしている。触手達は思い思いにうどんげを押さえつけ、性感帯を騷り、催淫粘液を抵抗できぬうどんげの皮膚になすりつけている。

「あつ、またあつ！ うあああ、いやだあつ、イキたくない！」  
絶頂の大波が近づいてくることを察したうどんげが、手足を滅茶苦茶にもがかせ、なんとかこの場から逃れようとする。

逃げ出すことなどできるはずもないが、今のうどんげにはまともな判断能力など残っていない。暴れるうどんげに苛立ったのか、ぶつくりとした唇に触手が押し付けられた。

何をされるか悟ったうどんげが必死につぐんだ口に、触手が侵入し、無理矢理高濃度の媚薬粘液をたっぷり流し込んでいく。

余計なことを考えるなっ！ 孕めっ、俺のものになれ、セックスしか考えられなくなれっ！ いいから俺の所有物になれ、オラッ！  
うどんげという女に孕み穴としての役割だけを求める触手の強烈な自我と悪意をうどんげは見た気がした。流し込まれる粘液汁の悪魔的な効果を知るうどんげは飲み込まぬよう抵抗するが、鼻にまで白濁粘液を注がれ始めたことで、呼吸すらできなくなる。ついにうどんげは観念し、コクコクと粘液を嚙下し始めた。

効果はすぐに現れた。淫煙で視界と思考が曇っていく。悪疫患者のようにうどんげの全身がガクガクと激しく震え始めた。

「いやっ、いやだああああつ、こんなのおお！ うああああ！」  
これから起きることを理解したうどんげは絶望の叫び声を上げる。  
絶頂の大波が近づいているというのにあれほど大量に即効性のある強力媚薬を流し込まれたのだ。

火事の火元に向かつて大量の灯油をぶちまけるようなものだ。今絶頂を迎えたら、大きすぎる快樂の濁流に飲み込まれたら、自分は本当に壊れてしまう。抵抗や知性を焼き潰され、代わりに隷属と服従で意識を書き換えられてしまう。うどんげは戦慄した。  
うどんげは唯一自由になる指先で掌に爪を立て必死に正氣を保とうとする。今踏みとどまらなければ、本当に壊される。

だがそれでも触手は容赦せず更に激しく抉る。加速する快樂のギアを乱暴にあげられたうどんげは、下り坂でブレーキが壊れたダンプのように桁違いの肉悦の極みへと急速に墮ちていった。

「いやっ、いやだっ、いやだああああつ！ イクッ、イグウウウ！」  
獣じみた声をあげながらついにうどんげは限界を超え、快樂のダムを決壊させた。それはまるで巨大ダムの放水口からあふれる奔流を肉体で受け止めるようなものだった。

「うあああああ、イクっ、イクっ、イグイグイグウウウ！」  
体が吹き飛ばされ、意識が粉々になり、大きな何かに飲み込まれていくような感覚。桁違いの快樂による蹂躞。

うどんげという女の人格と尊厳を粉々に踏み砕く巨大アクメ。腰が跳ね上がり、ガクガクと卑猥なダンスを踊る。

永遠の如きイキ地獄が終わり、巨大な絶頂の大波が引く中、うどんげの目がぐるんっと上を向いた。糸が切れたように体から力が抜ける。彼女はついに意識と抵抗を手放し捕食者に屈したのだ。





けん

## 文 触手肉餌 家畜調教中（噴乳体質、性感帯改造済）

「いやっ、いやああっ！ 離してっ、私いつ、こんなところでえ！」  
文はジタバタと暴れるが、拘束された四肢はビクともしない。

触手たちは押さえつけた文の体、性感帯の全てを貪るように鬨り、味わい、蹂躪する。触手たちが与える快楽は人間には到底できないほどの規格外の質と量だ。そんなものを知ってしまったえば女の肉体は作り変えられ、二度と触手から離れられなくなる。

それを知らず触手たちの悪辣な肉罨に無防備にも引つかかった文は、もしこのまま逃げ出せなければ触手の肉餌に成り果てる。未来に破滅そのものが待ち構えていることは確実だった。

「いやあああっ、胸えっ、胸をそんなに弄らないでくださいっ！  
胸への妖しい刺激に文は隠せぬほど甘い悲鳴をあげる。

何度も何度も徹底的に性感開発され、怪しげな触手注射を繰り返された文の胸は、かつてのささやかだったサイズよりふたまわりほど大きくなっている。敏感になったそこは触手が巻きつき、乳首をシゴきたてるだけで甘い肉悦が湧き上がる。快楽に屈した文は、ビクンと震えあつさりと白い喉を無防備に晒した。

びゅるるるっ。白い乳が勢い良く胸の先から噴き出した。噴乳体質。それは触手が文から栄養と魔力を搾り取るために肉体に施した不可逆の改造の成果の一つだった。

もちろん責められているのは胸だけではない。秘穴、直腸、尿道。ありとあらゆる文の穴が触手の責めから快楽を受け取るために都合良く改造され、今も執拗に耕され続けている。

そんな快樂漬けの責め苦を味あわされた文の開発済みの肉体は、肉の悦びにもはや全く踏みとどまることもできるはずがなかった。

「ああああっ！ うああああっ、いやあああああ……」

文は何度目かのひとときわ大きい絶頂を迎えたようだ。

その絶頂の大きさはぶしゅつと吹き出した愛液や母乳の勢いの良さが物語っている。ビクビクと文の腰が感電したかのように跳ね、やがて全身から力が抜けていく……

「ひいいッ、私っ、わたしっ、またあっ！ うわああああ！」  
くたりと脱力しかけた文の肢体がビクンッと大きく跳ねた。

触手たちがまだ終わっていないぞと文の肉壺をズボズボと掘削し始めたのだ。他の触手たちも思い思いの性感帯を鬨り始める。敏感になった肉体を責められ、1分も持たず文は再び絶頂した。

それでもぐぼっぐぼっ、くちゅっくちゅっという淫らな音は止まらず、文を容赦なく鬨る触手調教は激しさを増していく。

「やらっ、やらあああああっ！ おへっ、おとおおあああっ！」  
野太く低い獣じみた声で文はまた絶頂した。短く激しい呼吸が文が既に相当危険なところに追い詰められていることを示している。絶頂に全く構わず触手が再び動き始めると文は再び吠えた。

たっぷりと流し込まれた子種汁をとめどなくタラタラと垂れ流し小さな水溜りを作る秘裂。めくれ上がり花の蕾のような淫らな姿を晒す尻穴。地面に擦れるたび甘い刺激に反応して噴乳する乳。

それらはすべて射命丸文という一人の女がどうしようもないほど深く、触手に都合のよい肉贅として墮とされたという事実の象徴だった。貪り飽きた触手たちが離れてなお快樂の余韻に溺れ文は潰れた蛙のような姿でビクビクと震えている。

もはや触手の与える快樂なしには生きることができない文に、かつての天狗としての誇り高い姿の面影はない。二度と元の生活に戻れない文は、これからは文字通り触手たちの家畜として生かされることになるのだ。



けん

はたて 公衆便女 放置輪姦（服従刻印済、屈辱変換烙印）

「ううっ、あっ、いやああっ……… こんなの、激しすぎてっ………」  
ぱちゅんどちゅんっつと男は勢いよく腰をはたてに叩きつけている。  
後ろ手に縛られたはたては逃げ出すこともできず、男に貪られるままだ。男のモノは大きくエラが張った凶悪な形をしている。ズボズボと動くたびにはたての膣穴の形を歪め、自分の形と味を覚えさせるように強烈な快楽を流し込んでいる。

「うあああっ、いひいっ！ そこっ、そこだめなのにい………」  
どうやら男の肉槍がはたての弱点を探り当てたようだ。

男が腰使いをより巧みなものに変える。強いだけの快楽電流が甘くどろりとした中毒性のある悪辣なものに変わったことはピクピクと震えるはたての背中を見れば明らかだ。はたては必死に望まぬ快楽に吞まれぬように耐えている。

はたての敏感になった膣壁は、男の肉棒が内部で膨らんでいくのを目ざとく捉えた。射精されるのだ。膣内射精への嫌悪、そして期待が入り混じった感情が頭と子宮から湧き上がっていく。

「いいぜえ。そろそろ射精してやっから全部膣内で受け取れや！」  
男は吠えると一気に欲望を解き放った。

びゅるびゅるっ、ぶびゅるるうっ。男は何の遠慮もなしにはたての膣内になっぷりとこつてりとしたザーメンを吐き出していく。もちろんそこにはたての妊娠というリスクへの気遣いはまったくない。なぜならここは便所だからだ。便器に排泄することに何の遠慮もない。通気性の悪いそこには異臭がたちこめている。

この地下洞窟でも最も不潔な場所。そしてそこで名前も知らぬ男に膣内に精液を吐き出された。その事実がはたての心に嫌悪と屈辱の味を思い出させる。こんなの嫌、乙女の感情が膨らむ。そ

して、その感情は強制的な化学反応を生み出した。

はたての膣下に刻まれた淫紋が輝く。嫌悪と屈辱の感情が魔法術式によって歪められ肉体の発情に置き換えられていく。はたては燃えるような息を吐いた。体が熱い。射精されるたび、はたてに残ったプライドが疼き、強制的に彼女を発情させるのだ。

発情した肉体とその深奥の子宮は、欲情に燃える女の本能のままにごくごく美味しく美味しそうに精液を飲み干す。彼女が必死に保つ正気が事態を悪化させる。完全なる悪循環だった。

トロけきった表情からもう逃走の心配はないと縄を解かれたはたては男たちの肉棒に口と手で奉仕する。肉便器奉仕への報酬は大量のペニスによる集団射精だった。男たちははたてに受け止めるよう命令すると口めがけて大量の精液をぶちまけた。

当然それらは口には収まりきらず顔を汚らしく白化粧していく。汚濁の屈辱がさらにはたての理性を追い詰める。

グツグツと煮えきった頭は回らず、はたては口内の精液を飲み干し、鈴口に吸い付きちゅうちゅうと吸いたてた。

「へへへえ。精液はうめえかあ？ ここにいる限りはこれだけがお前の餌だからな。たっぷりザーメン飲んで空腹をごまかせや」  
男たちは格拉グラとはたての惨めな姿を嗤う。

屈辱を感じさらに子宮の奥がさらに熱を孕む。はたてはゴクリと喉を鳴らし、拒絶を訴える胃袋をどうにかなだめ精液を嚥下した。言葉通りはたてはここでまともな食事を与えられてはいない。体力を落とさぬためにはこんなものでも足しにするしかないのだ。

最低の屈辱だが、耐えるしかない。はたては自分に言い聞かせる。文がいつか助けに来てくれる。それだけが今のはたてに正気をギリギリのところまで保たせていた。



パンダイン

お燐 強制ペット化調教（淫紋刻印、感度上昇効果）

ゴリユツ、ズリユリユツ、ズブブツ。ズヂユツ、ブヂユウ。

肉壺の中で蠢く肉槍は執拗にお燐の弱い場所を責め襲る。抵抗する精神に甘い快楽を流し込むことで、抗う心をドロドロに溶かす。お燐の肉体に、女の本能が知る肉の悦び、男のよさと屈服する喜びを叩き込み、膣ひだのひとつひとつを手懐けていく。

「くううっ、ふううっ…… おほっ、くうああああっ！」

快楽の波にお燐はついに耐え切れず甘い声をあげてしまう。

ビクビクと震えるお燐に合わせ、男が悪辣な腰の動きを止めた。

「どうだあ？ そろそろイキたくなってきたらあ？」

男の物言いにお燐は顔を背けることで否定を表した。

男は気にした風もなく再び腰を振り始めた。パンツパチュンッ、パアンッ。肉と肉がぶつかる乾いた音が響く。お燐は唇を噛んで下を向く。感じていることを相手に悟らせないためだ。

否定はしたが、間違いなくお燐はこの男とのセックスにハマリ始めていた。捕まり、抵抗できないように淫紋を刻まれた。それ以来ずっと犯され続けている。男はねちっこくえげつないテクニクでお燐の肉体にセックスの良さを教え込んでいく。

お燐の背筋や脇腹がビクビクと震え始める。絶頂の前兆だった。今度はとても大きい波が来たとお燐は予感する。唇を噛み、手を強く握ることで耐えようとはするがおそろしく耐え切れまい。

お燐はあえて絶頂を受け入れ、絶頂の法悦を受け流すことで、精神が快楽に飲み込まれまいとした。先ほどは寸止めじみて焦らして見せた男も、今度はお燐が肉悦を極めることを邪魔するつもりはないようだ。むしろお燐を深く快楽の底に墮とし、肉悦の頂に押し上げるためにさらにストロークに悪辣な技巧を加え始める。

それはお燐を絶頂にへと突き上げる最後の一押しになった。

「こんなの反則っ、ああアーツ♡ おひいっ、うああああっ♡」

お燐はビクビクと長く震え、絶頂の悦びの大きさを表現した。

絶頂敗北の大波はようやく去ったようだ。はーっ、はーっ、とお燐はトロけた顔で下を向き、絶頂の余韻を味わっている。でろんと垂れた舌からは粘っこい唾液がだらしなく垂れ落ち、お燐がセックスにどハマリしていることをハッキリと示していた。

腰の奥、淫紋を刻まれたあたりが疼痛を訴える。欲しい、もつと欲しいと子宮がまだ物足りないより更なる快楽をねだる。当然男もうねるお燐の蜜壺の感触を通じて本音を分かっているはずだ。

「淫紋の効果はさすがだぜ。物欲しげにまんこがうねってやがる」男はひひつと下品に笑った。

淫紋の効き目という単語に嫌な予感を覚えたお燐は振り向いた。「へへへっ。この淫紋はなあ、絶頂するたびに濃くなるんだよ。」

するとどうなると思う？ だんだん肉体の感度が上がるんだよ」副作用としてセックス中毒の禁断症状が出るからお前は一生チンポなしじゃいらなくなるけどなあ。男は低く笑った。

淫紋はおそろしく呪いの類だ。それも重ねがけすることで肉体に深く染み込み効果が大きく、解呪が難しくなる類の。

「これでイクのは12回目だっけ？ もうお前は手遅れなんだよ」

男は嗤うと、お燐の腰をぐっつつかみ、再び肉を耕しはじめた。

「ひいっ、やだっ、やだああっ、もうイキたくないっ！」

真実を悟ったお燐は叫び逃れようとするがもう全てが手遅れだ。

逃れられぬお燐を家畜として飼い慣らすための調教、その終盤に入っていた。お燐の肉体を墮とし、誰が主人かを覚えさせ、精神を男の都合の良いものに書き換えるため、そして取り返しのないほど徹底的にお燐という存在を肉奴隷に作り変えるために。



瀬上大輔

咲夜 魔力搾取&性感帯強制改造中（淫紋刻印、感度増大）

「くうう、このっ、うう、このっ、離しなさいっ！」

咲夜は必死に身をよじるが手足に巻きついた触手はビクともしない。確かに尻にかかったのは迂闊だったかもしれない。

だがこの触手尻は異常だった。咲夜の服を剥ぎ取ると乳首や陰核、秘裂や肛門という女の性感帯を執拗に刺激するのみで目的が見えない。身動きがとれないまま触手の数だけがが増えていく。

「くうっ、ふううっ…… こっ、こんなのおお……っ」

咲夜の声には余裕が全くなかった。

乳首に巻きついた触手は乳首を優しく執拗に攻める。秘裂付近を責める触手は包皮の上からややわたと責めるもの、陰唇を何度もなぞり刺激するもの、捏ね回すように肉をほぐしていくもの。

それぞれが感心したくなるような見事なチームワークを発揮し咲夜の性感を高めていく。咲夜の吐息が欲情に燃え始める。

「なっ、それはっ！ ひいいっ、やめて、いやあああっ！」

咲夜の声が一気に緊迫する。秘裂をなぞる触手が増えたのだ。

今までより段違いに太く吸盤のついた触手が、咲夜の秘裂を責め始める。単になぞるだけではない。きゅぷきゅぷと吸盤で秘所を吸いたて始めたのだ。経験したことのない快樂に咲夜は思わず腰を浮かせ逃れようとするが逃げ場などない。

咲夜が喉を晒し快樂を訴える。秘裂、そして菊門は吸盤責めの前についてはほぐれ今や愛液で十分に潤っていた。ここまですれば触手は十分だと判断したのだろう。野太い触手を肉穴に押し当てて。そしてゆっくりと力をかけそこを押し開いていく。

ずぶ、ずぶんっ。ついに咲夜の秘めたる場所に内部の蹂躪を望む触手の侵入が成功したのだ。侵入した触手たちは、秘穴の内部

の粘膜に表面を吸盤を吸い付かせ、何度も何度も舐め上げ、吸いたてる。人間には決してなしえない器用で執拗な快樂が、咲夜の蜜壺の快樂神経を急速に目覚めさせていく。

「いひいいっ、おおおっ！ うあああっ、ひあああああっ！」

咲夜の腰が震え、卑猥なダンスを踊った。皮膚に守られていない無防備な体内の粘膜を触手たちが容赦なくほぐし、揉みしだき、吸い付く。甘くなぞり粘液を擦り込み、触手セックス快樂の良さを肉体に刷り込んでいく。

卑劣なまでの甘い快樂が咲夜の抵抗心をグズグズに溶かし、快樂本能を手懐け、性快樂を受け入れるべく肉体を作り変えていく。肉悦が意識にセックスの良さを刻み込む。咲夜は抵抗不能な体内から不可逆に、己を淫らに変えられる感覚に咲夜は戦慄した。

続いて触手は細く柔らかい触手を咲夜の菊門にあてがう。尻穴を容赦するつもりなど触手にはないようだ。ぐぷぷっ、ぐぷんっ。秘穴よりは時間をかけて触手が侵入する。ぐぷりっ、ぐぷっ、ずっちゅううっ。ズブチュツ、ずぶちゅちゅちゅちゅ！

「お尻っ、お尻はあ！ だめえっ、おひっ、おへあああああっ！」

尻穴を責められ間抜けな声を咲夜があげる。前の穴とは段違いの反応だった。その声から咲夜の最大の弱点が直腸であると見抜いた触手たちはさらに直腸を開発する触手を増やし、徹底的に咲夜を墮としにかかる。もはや生きたまま貪られるように犯され続ける咲夜は叫び狂うことしかできなかった。

その陰で他のものとは違う触手たちが咲夜の下部に何か紋様のようなものを刻んでいる。その恐ろしい意味を考える余裕は咲夜にはなかった。快樂でガチガチと震える奥歯を噛み締め、耐えきれず激しい絶頂に何度も押し上げられる。大人と子供のような圧倒的な力の差をいかして、触手は咲夜を弄び続けた。



瀬上大輔



## 咲夜 魔力搾取&陵辱輪姦中（淫紋刻印、強制発情）

「へへっ、このエロ触手に捕まるとは運がねえなあ」

触手に絡め取られていた咲夜を見つけた男は、過去の経験からそれが好き勝手に鬨りもののできる獲物だと知っていた。

触手の性質を理解した陵辱者と触手たちは共生関係にあった。

触手は女を作り替え、陵辱者は肉奴隷に墮ちるまで女を好き勝手にブチ犯す。この淫窟にのみ成り立つ奇異な関係だった。

耳から入った触手がクチュクチュと音を立てて脳の中を掻き回す。理性とか矜持とかそういう女の大事な部分をぐちゃぐちゃに壊し、代わりに欲望や屈服、隷属願望や快樂への耽溺といった男にとって都合の良い部分を肥大させていく。

頭を弄られながらも咲夜は必死に己の理性にしがみつこうとする。しかし男の肉槍がぐっぽぐっぽと蜜壺を掻き回すたびに思考が引き裂かれ、捻じ合わされた触手が尻穴をドリルのように攪拌するたび意識がグチャグチャにされてしまう。

「いひいい、私い、またっ、またあああ、イくうううっ！」

もはや快樂に抗えなくなっていた咲夜は大きな絶頂を迎える。

咲夜が絶頂を迎えたことで下腹部に刻まれた淫紋が輝く。快樂刻印たる淫紋がもたらす大量の媚薬成分が咲夜を侵していく。

淫紋は咲夜の絶頂を引き金として、咲夜自身の魔力を寄生触手が吸い上げるためのものだ。そのために触手は絶頂を迎えやすいように宿主の体をセックスのために徹底的に作り替えていく。

さらなる魔力吸収のために、絶頂のたびに淫紋は快樂物質を咲夜の脳を冒すために放出する。並の女であればとくに知性を壊され、セックスに溺れるほどの淫乱改造を受けた咲夜は、人並み外れた強靱な精神でもって紙一重のところ踏みとどまっていた。

「このまんこやべえっ、くうっ、中出ししてやるからなっ！」

うねりながら肉棒をギチギチと締め上げる蜜壺の心地よさに男も射精感が一気に高まったようだ。咲夜の腰を掴むと、絶頂直後の敏感になりすぎた肉壺に乱暴に何度も何度も激しいラストスパートのストロークを叩き込む。ドチュウ、グチュウ、ブジュウ！

「おへえええ、だめえ！ もうだめなのおおお！」

淫らに改造され尽くした淫窟に、いま男の膣内射精を受ければそれだけで絶頂の引き金になることは確実だった。

絶頂すれば再び淫紋の媚薬の波が来る。頭がドロドロに溶かされてしまう。だがもう咲夜には逃れる術も抵抗する気力もない。

ついに破滅のときがきた。咲夜の神聖な場所めがけて男の肉棒から勢い良く生命のスープがぶちまけられていく。びゅくっ、びゅるるっ、どびゅるっ。膣壁に煮えたぎる精液を浴びた咲夜は再び、大声で吠えるとあっけなく絶頂した。淫紋がさらに強く輝き、咲夜の頭に大量の快樂物質がどどどと流し込まれる。

「うわああっ、おへエツ、おおおっ！ おああああーッ！」

咲夜は痴呆じみた顔で絶頂を叫ぶ。もう知性は欠片もなかった。

咲夜の白い背筋がピンと反り返り、ビクビクと震える。眼がぐるんつと上を向き、三白眼になる。咲夜の強靱な精神は、もはや極限にまで追い込まれているのは明らかで、張り詰めた糸のようになそれがついに破断界を迎えようとしていた。

「たっ、たひゅけてえ…… おじょうさまああ……」

愛する主人を思い浮かべながら咲夜は意識を手放した。

もちろん咲夜が気絶しても陵辱と心身の不可逆な改造は止まるわけではない。むしろ強靱な精神の抵抗がなくなった今、手加減なしに二度と元の生活に戻れぬほど、咲夜という女を激しく造り変える悪辣な行為を妨げるものはないのだ。



瀬上大輔

## 咲夜 陵辱輪姦中（淫紋刻印、強制発情、性感帯改造済）

「うああああアツ、わッ、わらひいいいッ、まけないいいいッ！」  
部屋には知性を砕かれかけた女の絶叫じみた嬌声が響き渡る。

咲夜の声に余裕の色はない。それも当然で無数の男たちが咲夜を休みなく鬨り続けているのだ。その狡猾で悪辣な調教は、執拗で徹底的で限りがなく、咲夜の必死の抵抗を容赦なく削り落とし、男に屈服するよう意識を歪め、肉体を淫らに作り変えていた。

咲夜の性感を日常生活を送ることが不可能なほどに徹底的に開発した触手たちはもうこの場にはいない。餌となる魔力を徹底的に搾り取られ、全てを失った咲夜への興味を失ったからだ。

だが男たちは違う。彼らにとって抵抗する魔力を失った今の咲夜は無力で美味な獲物そのものだ。咲夜の全身につけられている装置は、微細な電流を快楽神経に流し込むことで、咲夜の開発されきった性感帯の感度をさらに操作できる悪魔的な代物だった。

「へえ頑張るねえ。ここまでいたぶって堕ちない女は初めてだぜ」  
触手と男たちの陵辱を耐え切る女冒険者は初めてではない。だがこの悪魔的な装置を使われて堕ちなかった女はいなかった。

いつまで持つか、どこまで楽しめるか。ハメ潰すまで咲夜を徹底的に鬨り抜くつもり男は嗜虐的に笑う。淫らに震える責め具が咲夜の性感帯に同時に押し当てられた。

「ひいいいッ！ 同時は卑怯ッ、だからあッ、うああああッ！」  
性感帯に押し当てられた淫具が震えるたびに咲夜の快楽神経に容赦なく法外な快楽電流がどくどくと流し込まれていく。

背筋を折れるほど仰け反らせる肉悦の稲妻が通り抜け、脳天へと達し、そこをグチャグチャに掻き混ぜていく。思考がグズグズに溶解する恐怖感と快楽で自分が失われる絶望感に襲われる。

「おへッ、おへえええッ！ アタマッ、コワれるううウッ！」  
あまりの快楽に咲夜の声は低く叫ぶようなものになっている。

「さあて、ここでこいつを捻ったらどうなるかなあ？」  
男が快楽電流を操る装置のダイヤルを思い切り捻った。

咲夜の目が見開かれ、瀕死の魚のようにビクビクと震える。先ほどまでの快楽の流量がホースから放たれる水流だとすれば、今はダム放水だった。トン単位のダムの放水を生身で受け止めればどうなるか、どんなバカにでもわかる。

「ーーーーッ、かひいッ！ ーーオッ！ オヘエッ！」  
押し当てられた淫具の振動で脳を直接掻き混ぜているように感じられる。頭から自分が快楽でバラバラに壊されていくような暴力的な刺激。咲夜の手脚がバネ仕掛けのようにデタラメに跳ね回る。

さらに淫具がぐりつと陰核に押しつけられる。大きな音を立てて咲夜が仰け反った。雷鳴のような絶頂。頑丈な拘束具がガチガチと激しい音を立てる。だが淫具がある限り快楽雷鳴は続く。咲夜は絶頂を階段の数段飛ばしで上るように無限に上り詰める。

それは徹底的な肉のリンチだった。弱者をいたぶり抜く快楽の濁流を流し込まれる度に咲夜の頭の中で快楽物質がどぼどぼと放出され、許容限度を超えた脳内麻薬で脳が快楽中毒にされていく。

たっぷりと肉贅を貪り続けた男たちは、咲夜がガクガクと危険なほど痙攣し始めると快楽拷問を中断した。壊したいが殺しては元も子もない。酷く小さな声が咲夜の口から漏れた。ああ？ 男は何事か呟く咲夜の口元に耳を寄せた。

「まッ、負けないい…… わらひい、ぜったいにいい……」  
快楽の天津波に飲まれてなお咲夜は抵抗の意思を示していた。

おもしろええ。男の顔がさらに嗜虐に歪む。壊れるギリギリで徹底的に鬨り抜いてやる。男は咲夜で楽しんでやるとそう誓った。



うがつまつき

リグル 絶頂耐久三〇分一本勝負（強依存性強力媚薬つき）

痺れ尻にさえかかかっていなければ、こんな雑魚同然のならず者相手に敗れるはずがなかった。だが現実是非情で、このダンジョンにおいて敗北した冒険者の末路は一つしかなかった。

「ひいっ、いやだあ！ あひいっ、ああ、うあああっ！」

嫌悪を訴えるリグルの声には甘い女の喜悦がはっきりと混じる。

男に無理矢理大量に飲まされた薬が原因に違いなかった。ローパーの触手粘液を原料とする強力な効果を持つ媚薬。強い中毒性を持ち並の女に使えば重い後遺症をもたらす劇薬だ。その媚薬が女体を強烈に蝕み、快楽に従順にさせているのだ。

「本当にやめてほしいか？ 勝てたら自由にしてもいいぜえ？」  
腰の動きを止めると、リグルの耳元で男は唐突に言った。

驚いた顔で振り向きリグルに対して男は続ける。ゲームをしよう。30分イクのを我慢することができたら解放してやる。男の言葉には女を狂わせる性技への自信が滲んでいた。リグルは考える。成功の見込みは分からないが今の状況を続けても先はない。わずかな希望に賭けるしかない。リグルは男にやると言った。

へへっ、いいねえ。じゃあ始めるぜえ。そういうと男は砂時計をリグルの側に置いた。これが落ち切れれば終了ということらしい。

砂時計の砂がゆっくりと落ち続ける。うう、くふうと欲情に熱い吐息をリグルは吐く。言うだけあって男は女を泣かせる術を知り尽くしていた。だが何度もあと一步の所でリグルは踏みとどまった。絶頂を耐えるたびに肉の飢餓感が増すのを必死に堪える。

時間の感覚などもうない。ちらりと横目で砂時計を見る。あと僅かだ。これなら耐え切れる。安堵が広がる。安堵は油断を呼ぶ。それなら、もう少し気持ちよくなってもいいかもしれない。男が

リグルの口元に指を伸ばし舌を弄び始めたが抵抗しなかった。

「あっ、ひやああ、ナカあ♡ ゴりってえ♡ らめらのにいい♡」  
舌を掴まれ呂律の回らぬリグルは甘く媚びた声で啼く。

ピンク色の舌を自分から男に差し出すリグルの姿はもはや肉體は屈服し精神も陥落寸前であることを示していた。唐突に。男が何かを舌の上に乗せ、そのまま吐き出せぬよう口をふさぐ。

されるがままになっていたりリグルは反射的にそれを飲み込んでしまう。いまのクスリはあの強力な媚薬だとリグルは気付いた。あんなものをもう一度飲まされたら、おかしくなってしまう。

「あれだけの時間我慢した分ご褒美だ。思う存分イケよ」

男が耳元で囁く。横目で見る砂時計の砂は落ちきっている。イッても大丈夫なのだ。もう耐えなくてもいい。気持ちよくなってもいいんだ。思考の鈍ったリグルの中で精神の最後の門が外れた。

「うあああっ、イクッ、イクッ！ ああああああっ！」  
今までお預けをされ分まで盛大に叫びながらリグルは絶頂した。体の中から淫らな快樂奔流が鉄砲水のように噴き出す。思考や理性、矜持というリグルの高度な脳機能が司っていたものを二度と元に戻らぬほどグチャグチャに蹂躪する。気持ちいい。イクことがこんなに気持ちいいなんて。

何事も最初の経験がその後の人生に大きな影響をもたらす。初めての体験である絶頂を女の許容限度を超えて体験してしまった。は女として人生は終わりだ。残りは男の肉玩具として生きるしかなくなってしまう。

勝負は俺の勝ちだな。男は呟いた。15分用の砂時計を再びひっくり返す。あと何度絶頂させられるだろうか。キメセクの破壊的な快樂を刻み込み薬とセックスなしではいられなくなるよう、男はトロけきった顔で呆けているリグルを再び激しく犯し始めた。

うがつまつき



## リグル 徹底輪姦調教（媚薬中毒、セックス依存症）

薄暗くじめじめとした部屋に大勢の中年男がひしめく。不快どころではない空気の部屋の中央には男たちに罵られるリグルの姿があった。男たちはみな一様に下品ならずものたちだった。

数日前まで中性的な美貌の冒険者として尊敬と注目を集めていたところであれば、リグルは自分に好色な視線を向けただけでも相応の報いというやつを受けさせていただろう。

だが今は歯牙にもかけなかったであろう男たちにリグルは自分の体を好きにさせていた。それも強姦ではない。リグルが自分を犯してくれるよう懇願したのだ。ローパーの触手粘液が原料たる反則級に強力な媚薬。悪魔的な強い中毒性を持つ媚薬を何度も使われ犯されたリグルは重度の中毒患者に堕ちていた。

男たちは休みなくリグルを犯し、媚薬漬けにした。媚薬によって増幅された法外な快楽の味を覚え込ませたのだ。そのため今のリグルは媚薬とセックスという最悪の二重依存症に苛まれていた。クスリが切れた禁断症状に耐えかねて、リグルが自分から媚薬と陵辱を懇願するようになるまでに時間はかからなかった。

「あああつ、いくつ、膣内にびゆくびゆく射精されていくう！」  
甘い声をあげ背筋を弓のように反らせ、白い喉を無防備に晒しながらリグルは派手に絶頂した。

リグルの腰を抱えた男が絶頂する肉壺の締め付けを楽しみながら大量の精子を最後の一滴まで膣内に吐き出す。卵子を孕ませるために子宮内を我が物顔で蹂躪する精子がさらに数億も加わった。「オラッ、自分がイッたからって休んでんじゃねえよ！」

別の男がリグルの髪を掴むと口元に汚臭を放つ肉棒を押し付ける。リグルは抵抗せず、素直に肉槍を口に含むと口腔全体を使って

丁寧な奉仕を始めた。ここにきて叩き込まれた奉仕テクニックで男をもてなす。口内に広がる真夏のドロブのような味と臭いも媚薬のおかげでリグルには極上の甘露のように感じられた。

リグルは肉壺と尻穴はもちろん口と両手を使って男たちを喜ばせる。たつぷりとかけられた精液でドロドロに白化粧されたその姿は今の彼女の身分が肉便器だとはつきりと証明していた。肉便器を気遣うものはいない。使い潰すまで使われるだけだ。

「おい、こいつ反応悪くなってんぞ。穴も緩くなっていくしよお」  
道具の調子が悪いというようなぞんざいな口調で男が文句を言う。調子の悪い道具には油を差せばいいだけだ。別の男が注射器を取り出した。今日はあと一本までだぞ。それ以上は本当に頭が壊れるからな、と念を押された男が注射痕がたつぷりといたりグルの細腕に針を突き刺す。ポンプを押し女の脳を壊す大量の媚薬成分を血液内に容赦なく流し込んでいく。効果はすぐに現れた。

気絶しかけていたリグルが目を見開きビクビクと痙攣する。すべての知覚が鋭敏になり、前後の穴をほじくる男の肉棒の形すらも膣壁で感じ取ることが出来る。さらに流し込まれる快楽の質と量が段違いに上がったこととすぐに絶頂へと押し上げられる。

「あひいっ？ おへっ、おへあつ！ おごおあああああつ！」  
もうリグルの上げる声は知性というものが含まれていない。彼女の許容限度を超えた快楽が脳を焼き潰している代償だった。

「もう少し淫乱に仕上げたら客を取らせようぜ。よく稼げるだろ」  
絶頂に呆けるリグルの傍で男が言う。そうだなと別の男が応じる。要するに薬漬けで売春させる気なのだ。そうなれば未来に待つのは破滅しかない。もちろん男達はリグルの意見を聞く気はない。

この日、リグルはさらに3本の媚薬注射を受け、ボロ雑巾のようになるまでたつぷりと犯され続けた。



うがつまつき



## リグル 肉便器売春中（極度の媚薬中毒、媚薬依存症）

闇の歓楽街の外れにその娼館はあった。金さえ払えば男たちのどんな要望にも応じるのが売りだという。

女の質は積んだ金額に比例する。金を積めば極上の女を抱ける。つまりは逆もあり得るとのことだ。

「ふう、ザーメンだした、だしたあ。穴はいい感じだったわ」リグルを使っていた男は、リグルの口から肉棒を引き抜いた。

尿道に一滴も残さぬようにちゅうちゅうと鈴口に吸い付いていたりグルは、ありがたうございます、と不明瞭な呻き声をあげた。

リグルはかつてはこの娼館において上級奴隷娼婦として働いていた。クスリ欲しさに必死に男とまぐわるリグルの人気はかなりのものであった。しかし娼館にも入れ替わりはある。新たな元冒險者が次々と奴隷娼婦としてここに来る。飽きられ始めたリグルの人気は陰り始めた。

クスリで頭が壊れかけたリグルの奴隷娼婦としての人気は落ちていき、より廉価な値段で春を売り、個室から大部屋へと移った。ついには格としては底辺の精液便所に墮ち、地下室で体を売っている。いや体を売るといふよりは肉オナホとして穴を使っていただいていう方が正しい表現だろう。

値段は貧しい者でもギリギリ払える程度。別売のクスリを使えば具合と反応がよくなるということを使う客もいた。

次の客が現れたようだ。ガマガエルに似た顔。乱暴さで他の娼婦からは嫌がられていた客だ。風呂嫌いらしく、プンと鼻をつく異臭も嫌悪の一因だろう。だがリグルは努めて愛想を浮かべる。「へへへ、いくら好き放題してもいい便器つてのも悪くねえな」男はリグルへの嗜虐欲を隠しもせず下品に笑う。

「思う存分ブチ犯して便女の立場ってモン分からせてやるからな」獣欲に粘ついた口が凶暴に歪み、汚れた乱杭菌が覗いた。

リグルとしても勘弁願いたい手合いのはずだった。しかしリグルは媚びた態度で男を迎えた。その理由は剥き出しの男の肉棒にあった。何日も洗っていないであろうえげつないサイズの肉槍にはクスリがたっぷり塗られている。ゴクリと生唾を飲んだ。

「オラッ、いくぞっ！ ハメ潰すまでズボズボしてやっからなあ。俺のチンポの凄さを死ぬほど教え込んでやるぜえっ！」

ずぶずぶずぶっ。何の前戯も気遣いもなく、リグルの秘裂に明らかには巨大すぎる剛棒が捻じりこまれる。だが媚肉は正直だった。内側から押し広げられ、粘膜にクスリが擦りこまれる感触にリグルは歓喜の表情を浮かべた。

男はアザが残るほど力強くリグルを押しさえつけ全体重を乗せてズゴズゴと杭打ちのようなストロークを叩き込み始めた。後頭部が石壁に何度もぶつかる。しかしクスリとセックスの快楽で全てを押し流されたりグルは痛みすらもスパイスに感じている。

オラッ、言えっ。ちゃんと言えたらもう一本注射してやるっ！男がリグルの耳元で囁く。誘うというよりはクスリをネタに強請ると言った方が近い。もちろんリグルの選択は決まっている。

「き、キメセク狂いの淫乱の肉便器に立場を教えてください！」百点満点の回答だった。よく言えましたあっ！ というように男がリグルの首筋に乱暴に注射器を突き立てた。

この客もリグルにとってはまだマシな方なのだ。クスリ欲しさに最低の客にも媚びを売り、己を貶め、モノ扱いも受け入れ犯され続ける毎日。その末路は蜘蛛の巣にかかった美しい蝶同然だった。男たちに貪られながら妖怪の頑健さゆえに狂うこともできず、今日もリグルは陵辱を懇願し続ける。

水橋ルルスイ(探索中)

肉の落とし穴にはまった！  
触手が尿道から入り込み、クリの根元に強烈な性感電流を流しながら別の触手がクリをしごきあげる！

何時間もの間クリを徹底的に虐められ  
43回もクリアクムしてしまった！

更に巨大スライムにつかまった！

両手両脚を拘束され、スライムディルドに  
2穴を激しくピストンされる！

奥を何度も何度も激しく突かれ、  
快感に敗北し、失神してしまった…

パルスイ スライム魔力捕食中（異種姦中毒Ⅱ）

自分が落ちた罌を落とし穴と油断したのが誤りだった。油断したパルスイの穴という穴めがけて大量の極細触手が殺到する。

「ひいい、なにこれえ！？ ちょっとなにをっ、んひいいい！」  
触手たちはパルスイのスパッツを手際よくむしり取ると、陰核に電気触手を押し付ける。ビリビリビリッ！ 眩しく白く光る。

驚くほど強烈な快楽電流がパルスイの下半身に流れる。快楽本能に響くような甘く強烈な刺激。手足から力が抜ける。股がゆるむ。その間に触手たちは秘裂、尿道へと一気に侵入を開始した。強烈な違和感が快楽電流による甘い刺激で黙らされてしまう。

パルスイは甘い悲鳴をあげ抵抗どころではなくなってしまう。遅まきながらこの肉の落とし穴の罌の危険性に気付いたようだったが、もはやすべては手遅れだった。

肉壺、そして尿道と膀胱。不可侵にして神聖であるべき秘められたる細道を触手たちは性感帯とすべく、人間には不可能な繊細な動きと快楽電流で容赦なく開発していく。

「んひっ、ひいいいっ、そこっ、そこはああああ！」

極細の触手たちはクリトリスという快楽神経の塊を表と尿道裏からゴシユゴシユと刺激し続けている。パルスイは度を外れた未知の快楽と人外の性技に戸惑い嬌声を上げることしかできない。さらに、本人すらも知り得ぬ弱点に触手たちは目をつけたようだ。膀胱の下側。体内側の壁を触手たちは執拗に責め始めた。

「おひいいいっ、ひいいいっ！ なっ、なにっ、これええええ！」

パルスイはおもわず叫んだ。声には困惑と喜びが混じっていた。

Gスポット。膈内の天井側にあるザラザラとした性感帯で、開発すればクリトリスに匹敵する強烈な快楽を生み出す女の弱点と

なる。その場所はおおむね膀胱の裏側にあたる場所に存在する。触手たちは膀胱側から刺激してGスポットを探り当て、淫天井に快楽電流を流しそこを性感帯として急速に開発したのだ。

「ひいいいッ、知らないっ！ こんなっ、こんらのしらないいいい！」  
パルスイは未知の快楽に頭を振り叫ぶがもはや逃げ場などない。

陰核、肉天井という弱点二つをすでに己の所有物としていた触手たちはさらに膈奥へと魔の手を伸ばす。女の聖域、子宮口近くのポルチオ性感帯に快楽電流を流し始める。

43回。それがパルスイが触手快楽に届した回数だった。触手たちは用済みだと解放したが、短時間に限界を超えたアクメをキメたパルスイはトロけた顔でその場にぐったりとしている。

その無防備さはこのダンジョンにおいて致命的だった。パルスイは新たな捕食者、巨大スライムに捕まってしまったのだ。

「あひいいいっ、おひい！ 反則う、らめっ、んほおおお！」

ブリュッ、ブポッと尻穴から恥ずかしい音が響く。だがパルスイにはそんなことを気にする余裕もなく、おへっ、んほおお、と無様に喘いでいる。かつて地底の大橋の上に佇んでいた橋姫の冷たい美貌と威厳など影も形もそこにはなかった。

両手両足を拘束され、スライムに二穴を激しくピストンされ、陰核を吸われ、尿道を押し広げられ、そのたびに情けない声で吠えるように嬌声をあげる。先ほど触手たちに徹底的に開発された女の泣き所を、今度は野太く柔軟なスライムに責められたとあってはどんな女もひとたまりもなかった。

もはや数えることもできぬ回数数の絶頂を迎えたパルスイはついに快楽に敗北し失神した。彼女の肉を貪り尽くしたスライムが去った後もぼっかりと開いた二穴を晒したままアへ顔を晒し倒れ伏している。声を聞きつけた次の捕食者が媚肉を見つけたようだ。

星熊勇儀【探索中】

両腕を拘束され、動作反転魔法をかけられた！  
脚を開じようとするとも開脚してしまう…

強力ローター付触手バイズに  
激しく責められ、自ら脚を  
開きながら、42回もイカされてしまった…

内側に高速回転するぶらしの付いた筒型の  
突起オナホに乳首とクリを責められる！

突起をオナホ責められ、為す術もなく  
63回もイッてしまった…

## 勇儀 触手性感開発中（触手姦中毒Ⅱ）、快樂依存症ⅡⅡ）

姉御肌で知られ、剛力を持って荒くれ者の多い地底をまとめたきた女傑。勇儀が地底を歩けば道を譲らぬ者はいなかった。たとえ他の場所にあっても仁義と道理を重んじ、それが通らなければ実力でもって正義を通す。それが星熊勇儀という女だった。

だがその栄枯盛衰の故事通りどんなものごとにも終わりはある。「んぎいっ、ほおおっ！ うああああっ、ぎひっ、おおっ♡」勇儀はガチガチと歯を鳴らし、快樂の責め苦に耐える。

地底において荒くれ者揃いの鬼たちをまとめ、万人から尊敬を集めた勇儀の威厳など欠片もない表情だった。快樂にトロけかけ、必死に耐えようとする表情。

もしそれを男たちが見れば、ある者は失望し、ある者は嗜虐心のままに彼女に襲いかかっただろう。普段の威厳ある勇儀の姿と今の乱れ様のギャップを考えれば当然のことだろう。

あの勇儀が、触手によって両腕を押さえつけられ、乳首と陰核をブラシ付きオナホ触手によって徹底的に責められ、秘所に至っては強烈なローターつきの触手パイプによってぐぼぐぼと責め立てられているのだから。

「ほおっ！ おひっ、おへええ♡ おおっ、おおっ、おおっ♡」勇儀は明らかに欲情し、腰をカクカクと踊らせ、理性を限界を超えた女の快樂で削りおとされている表情で情けなく喘ぐ。

普段の勇儀なら間違いなく何の苦もなく振り解ける程度の相手にもかかわらず、自分から脚を広げ、快樂を受け入れている。はしたなく喘ぎ、されるがままになっている。本来の勇儀を知る者であれば容易には信じないだろうが彼女が快樂に屈している。それは今の勇儀のトロけた顔を一目見れば明らかだった。

「許ひてっ、もうゆるひてええええ、またイグウウウッ！！」勇儀は情けない声を上げて何度目かの絶頂を迎えた。

体を反らせ、無様に叫び、白い喉を無防備に晒す。勇儀自身の涎と涙と鼻水で端正な顔をぐちゃぐちゃに汚し、舌を白旗のように突き出し、愛液を噴水のように吹き出しながら絶頂した。

許して。そう勇儀は言った。本来であればあってはならない発言。プライドの高い鬼が知性を持たないトラップごときに屈し、無様に許しを乞うなど絶対にあってはならなかった。ましてや鬼の顔役とも言える地位と權威を備えた勇儀が哀願するなど鬼の種族全体の名誉に泥を塗るに等しい行為だった。

だがそれでも勇儀は許しを乞わずにはいられない。クリトリスと乳首を情け容赦なく責め続ける触手の悪辣な責めは鬼の桁外れの忍耐すらも粉碎し蹂躪するほどの強烈さを備えていた。

激烈な快樂で知性と矜持を焼き尽くし、快樂の奴隷であることを思い知らせ、肉奴隷としての自覚の烙印を刻む卑劣な罠。こんなものに責められては、女であれば屈してしまうのは当然だろう。「おっひ、あおおおおっ♡ ほおおっ、んおおおっ♡」

絶頂を堪能する勇儀をさらに追い詰めるように触手の責めが加速する。絶頂に押し上げられて降ってくるのができない。いやさらに放り上げられ強制的に甘い肉悦を重ねさせられる。

強すぎる快樂にプライドや思考という高尚なものを焼き尽くされ、かわりに絶頂を迎えすぎたことによる多幸福感が勇儀を包んでいく。卑劣な罠によって勇儀は何度も絶頂し、女として完全に敗北した。やがて鬨り飽きた触手罠は勇儀を解放した。だが勇儀は屈辱の快樂の味が忘れられなかった。あの快樂をまた味わいたい。鬨られイキ狂いたい。潜在意識に残ったその願望がやがて彼女を仲間共々破滅させることになる。



ばーか

ま●こ  
見せろ

+

お、おっはい  
見せてっ

お前らもう  
終わってんだよ

くく...

?

シヨン便漏らせ

ンロ

この2人が  
釣れるとはな

ンロ

社

ズナ

おっはっはっ

おっはっはっ

おっはっはっ



おっはっはっ

おっはっはっ

にゆう

おっはっはっ

おっはっはっ

おっはっはっ

おっはっはっ

おっはっはっ

おっはっはっ

おっはっはっ

おっはっはっ

おっはっはっ

おっはっはっ

おっはっはっ

おっはっはっ

おっはっはっ

おっはっはっ

おっはっはっ

おっはっはっ

おっはっはっ

## 幽香、靈夢 強制催眠輪姦中（催眠中、絶対服従、屈服刻印）

薄暗いダンジョンの一室。そこにはむせ返るほどの男たちの欲情した臭気、不快どころではない空気が立ち込めていた。

たるんだ腹を晒す脂ぎった中年男たちは、いずれもそびえ立つ下半身を露出し、その瞳は脂ぎった獣欲に光る。あふれかえるほどの女への性欲と嗜虐欲を隠そうともしない。まともな女であれば絶対に近寄ろうとは考えない類の男たちだ。

男たちの輪の中心には二人の女がいた。風見幽香と博麗靈夢、二人は多数の男達からギラついた視線を白い肌に向けられながらも逃げ出そうともしない。原因は先ほど彼女たちが浴びた赤い光、催眠と絶対服従光線の罫にあった。じりじりと輪を締めじり寄ってくる男たちにも靈夢たちは逃げようと思わない。

「おっ、おっばい！ おっばいを見せてっ」

相互牽制する男たちの均衡を破って、気弱そうな中年男が叫んだ。圧倒的強者である二人に胸を見せろなど、そんな真似をすれば最良でもどちらかに半殺しにされるのが相場だった。そんな話を通るわけがない。普通であれば。だが靈夢は素直に服を大胆にはだけ胸をあらわにする。白い素肌に男たちの視線が突き刺さる。

幽香も一瞬遅れて胸を放り出す。ぼるんっと勢いよく震える胸がその弾力性とサイズをアピールしていた。男たちはゴクリと生唾を飲んだ。間違いない。「あの光の罫」の効果は出ている。この二人は自分たちの言いなり。肉玩具なのだ。何をしてもよいのだ。そう確信した男たちの要求は加速的にエスカレートする。

マンコを見せろ。ション便を漏らせ。男達の試すような言葉にも靈夢も幽香も何の抵抗もなく素直に従う。男たちの獣欲の熱がヒートアップしていく。

「オラッ、こいつもだ！ こっちのチンポもしゃぶるんだよっ！」  
幽香は目の前に突き出された三本目の肉棒にしゃぶりつく。舌は執拗にカリ首のエラの裏に絡みつき、溜め込んだ恥垢を徹底的にこそげ落とし、味わいながら汚れを舐め落とししていく。

精液と恥垢という至高の贅沢を味わうために幽香は必死に口腔奉仕を続ける。「精液と恥垢にはヘロインのような最高の悦楽と発情作用、そして中毒性がある」男の言葉が催眠を介して、幽香の脳に既に事実として刻まれていた。濃厚なオスの性臭を吸い込んだことで幽香の頭からは知性がドロドロに腐り落ちていく。

横目で見れば、靈夢は男たちから小便を浴びせられ、必死に口を広げて飲み干していく。小便が途切れれば今度は床にこぼれた尿を必死に舌で舐めとる。大きく見開かれた目と無様で必死な態度から、靈夢も催眠で頭を弄られていることは明らかだった。

幽香がふと顔をあげる。いや、何かがおかしい。そもそもどうして自分たちはこんなことを？ どうして私は男の股座に顔を埋めているのだ？ 幽香の頭が急速に冷え、濃い霧が晴れたように疑念が浮かんでいく。幽香の奉仕の動きが鈍る。

だがそれも続かなかつた。首に冷たい針の感触を覚えたからだ。プスリと太い針が幽香の首に刺さっている。注射器の中身はすべて血管へと流し込まれていた。催眠の効果が切れる前に男が強力媚薬注射を行ったのだ。念のために再度催眠の光を浴びせる。

「へへっ。もう手遅れだよ。これをキメてプチ犯されたらもう戻れないからよ。キメセクの味を覚えたら一生チンポ奴隷さ」  
男の言葉がぼんやりとした幽香の脳に染み込んでいく。

薬が催眠潰けの幽香の脳を冒していく。すべての感覚が鋭敏になる。オスの精臭やグロテスクな肉棒がとてつもなく魅力的に見える。欲しい。今すぐハメて欲しい。理性が吹き飛んでいく。





キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

キーン

にゅー

幽香、靈夢 強制催眠輪姦中（催眠中、絶対服従、媚薬注射）

男たちの腰使いは激しく、幽香の前後の穴を突くたびにズドッゴボッと凄まじい音がする。腹が破れるほどの衝撃はしかし幽香にとって恐ろしい程に快樂に変換され、脳を焼き尽くしていた。催眠と強力媚薬によって痛みすべてが快樂へとたつぷりと増幅された上で、喜悅に変換されるために、どれほど激しくされても激しい行為の全てが女を手懐ける肉悦となるのだ。

「おっ、おぼっ、ゴおっ！ ああああッ、おアアアッ！」  
すでに前後に挟まれた靈夢の声は獣じみたものになっている。

催眠で感度を何倍にも引き上げられたことで幽香より一足早く頭が壊れたのだ。今は二人の男にサンドイッチされながら何度も快樂の頂に強制的に押し上げられ、何度も法悦を極めさせられては氣絶し、再びセックスによって覚醒させられるという、女としては思いつく限り最悪の快樂の地獄の中にいた。

脳内の快樂物質が壊れたように噴き出し靈夢の脳を焼いている。あれほど激しく脳を焼かれては、靈夢はもう二度とまともな生活に戻れないだろう。もちろん幽香も大差はない。壊しすぎなかったのは男たちが長く幽香で楽しむことを望んだに過ぎない。

「オラッ、精液だすぞ幽香あ！ 膣内射精されながらイけっ！」  
イけっという命令を受けた。男の命令、それは肉奴隷の幽香にとって絶対だった。膣内射精を受けた瞬間に自分は絶頂しなければならぬ。催眠と媚薬によって男たちに絶対服従を脳に刻み込まれた幽香はそのことを当然の事として受け取った。

膣内に意識を集中させる。より快樂を得て大きく絶頂する為だ。びゅるっ、びゅるるっ、ぶびゅるるるるっ。白い男のマグマが幽香の膣内へとごぶりごぶりと注ぎ込まれていく。膣襞に精液が

勢い良く叩きつけられるたび、それを知覚するたび、催眠の条件付けによって快樂の小爆発が幽香の中で起きていく。

「あっ、うあああああッ！ イくっ、イッくううう……ッ！！」  
幽香は吠えるようにして背を反らせ足指をピンと張り絶頂した。快樂電流が背筋を駆け上がり幽香の頭をスパークさせる。幻想郷最高の美女の脳の血管がプチプチ千切れる音が聞こえるほどの肉悦の爆発。後悔するほどの媚肉の悦び。一人の女が受け止めるには大きすぎる法悦が幽香の思考回路を焼き尽くしていた。

「くううっ、俺も射精すぞっ！ ケツ穴に射精されてイけやっ！」  
幽香のギチギチと締まる肛門を味わっていた男も絶頂を宣言した。いまだ膣内射精の絶頂から降りてくることでできていない幽香は戦慄する。膣内射精で絶頂して敏感になっている今、直腸にビュクビュクと精液をかけられたら。おかしくなる。精液で壊される。靈夢の雄叫びのような声が響く。自分もああなってしまう。

だが背後の男は幽香の都合など一切頓着せずぐぼぐぼと尻穴を抉り続ける。一際大きく腰を引き、そして一気に直腸の奥まで貫いた。ここで吐き出すつもりなのだ。亀頭が膨らみ、子種汁が一気に直腸めがけて噴き出していく。

「おへっ、おへえええっ！ おじりっ、せーしがキてるうう！  
びゅくびゅく出されてえっ、アタマがコワされるうう！」  
幽香は情けない声をあげた。直腸が燃える程に熱くなる。白濁のマグマが本物の熱を持ったようだった。その熱で頭が煮えていく。  
「ぐおおおっ、いいぞ幽香あ、死ぬっ、イキ死ぬっ！」

男が叫び吠え、絶頂直後の肉穴を精液を射精しながらズボズボと突き続ける。幽香に快樂の過剰摂取の上乗せが頭に襲いかかる。二人の叫び声がダンジョン中に響く。男たちに貪られながら靈夢と幽香、幻想郷最強だった二人は、どこまでも墮ちていった。



是乃

依神姉妹 ミミック罨捕獲（触手麻痺液注入済み、魔力捕食）

お宝目当てに姉とダンジョンに潜った。奥底を目指して順調に進み宝箱を見つけたところまではよかった。紫苑はそう考える。しかし宝箱がミミックだと気づかないままに、妹がうっかり開けたのが運の尽きだった。たちまち宝箱から湧き出てきた無数の触手たちが絶好の獲物を絡め取っていく。

「いやっ、いやああっ！ いやだあっ、そんなところはあっ！」  
処女肉穴を太肉槍で抉られた女苑の悲痛な叫び声が部屋に響く。

無数の触手が柔肌めがけ服に潜り込み、服をたやすく引き裂き始める。肌をまさぐる触手たちの気色悪い感触に深刻な危機感を抱いた紫苑もさすがにまずいと感じ、引き剥がしにかかった。

「このっ、気持ち悪いっ！ 離せっ、私たちを離しなさいよっ！」  
その態度が獲物にありついた触手たちの勘に障ったようだ。

うるさい黙れ、というように紫苑の口に太い触手が捻じ込まれた。触手の先からどぶどぶと気色悪い粘液が流し込まれていく。

「うぐぶうっ！？ げえっ、おごっ、うごおおおお……っ！」  
喉や胃が灼ける。脳を直接揺らされているような不快な感覚。

思考というものに急速にモヤがかかり始め、かわりに全身の感覚が鋭敏になっていく。肌の上をナメクジのようにうごめく触手の細かな所作、肌に念入りに発情体液を擦りつけていくブラシ状の触手のヒダの一本一本がはつきりと知覚できる。これはヤバイ。

「うあああああっ、いやあ…… たっ、たすけて姉さん……」  
妹の弱々しい声に、紫苑は横目でそちらを見た。

女苑はもはや焦点の合わぬ目で遠くを見つめながらガクガクとおこりのように痙攣している。その異様な様子から触手に何かされたことは明らかだ。ポタリポタリと秘所から大量に垂れ落ちる

粘液、あふれ出るその量が妹の惨状の理由を物語っていた。

たやすく女を壊す発情液を原液そのままに粘膜から直接流し込まれれば触手たちの都合の良い肉人形に墮とされてしまう。紫苑は考える。どうしてこんなことになったのだろうか、と。

たとえ男たちに捕まっても、私たちがならうまく口車に乗せた上で不運と不幸を押しつけて逃げ出せる。ためらう紫苑を言いくるめたのは妹だった。その時は納得したのだ。だが相手が触手とあつては貧乏神と厄病神の能力はなんの効果も発揮しなかった。

その間にも自分の体が内側からドロドロに溶かされような熱さを感じる。肉体を触手を喜ばせる肉オナホに作り変えられているのが分かる。逃げなければいけない。にげる。にげるって、なに？

脳まで粘液の媚薬毒に侵され、思考が急速に溶けていく感覚に震えながら紫苑はボコリボコリと触手が内側で暴れまわり妊婦のように膨らんだ腹をぼんやりとされるがままに眺めていた。

「おげっ、おげえええっ…… いやっ、もういやあ……」  
紫苑の腹がボコオと膨らんだ。手脚が電気を流した蛙のようにピクピク震える。それでも紫苑はドロリとした目でされるがままだ。

丸三日以上触手たちは依神姉妹をいたぶりつくした。法外な快樂と人外の喜悦によって散々弄ばれ続けた二人はぐったりと石造りの床に横たわっておりピクリとも動かない。

ズルズルとまだ彼女らを貪り足りぬ触手たちが彼女らを暗い地下への口を開けている宝箱へと引きずっていく。そこに引きずり込まれば救出の希望もない。彼女らの破滅は確実になるが力の入らぬ体では抵抗などしようがない。

ボタン、と宝箱が閉じた。次の生贄をミミックたちは待ち続ける。それまでは神ゆえに何をしてもほぼ死なない頑丈な彼女たちを生かさず殺さずミミックは弄ぶつもりだった。



8000

サグメ 強制絶頂お預け調教（強発情効果薬物依存症）

薄暗い地下室の一室にサグメは拘束されていた。

その呼吸は荒いものになっている。肉体が疼くのだ。胸や秘所など性感帯という性感帯、感度を数十倍に改造された部分が、空気に触れたり服が擦れたりするだけでも甘い声が出そうになる。その声を辛うじて堪えられるのは、サグメに常人とは桁違いの自制心があるからに他ならない。

「いい加減わきまようや。肉奴隷の立場ってやつをさあ」

本来の力を出せれば瞬殺できるはずの男が、好色な視線でサグメの体を視姦する。砲弾型のハリのよいサグメの胸は調教と改造によつて以前よりもひと回り以上大きくなっている。そこに男の手が無遠慮に伸びた。サグメは男を睨みつけ、反抗しようとした。

「ふざけないでっ、私をここから解放しっ…… ひいいっ♡」

サグメの強がりには、胸を鷲掴みにされてあっさり断ち切られた。

胸の柔肉に男の芋虫のような指が沈み込んでいく。むにむにと男が乱暴に揉みしだくだけで腰が砕けそうになるほどの快樂がサグメを襲う。いくらサグメが強がろうと全く説得力はなかった。

「へへへッ、胸だけでこうなるってんならここはどんなだよ」

男が容赦なく、サグメの秘所に指を二本ぐぢりと挿れた。

中でグリグリと捻り攪拌するようにしてサグメの肉壺をグチグチと責め立てる。サグメはそれだけで声も出せずガクガクと震えている。軽い絶頂寸前にすら追い込まれているようだった。

秘裂から男の指が引き抜かれた。指はサグメの白く濁った本気汁によつていやらしくテラテラと輝いている。

「お前もイキたいんだろ？ いい加減素直になれや、なあ？」

男は愛液まみれの指を舐めまわしながら見透かしたように笑う。

ギリリ、とサグメは歯を噛み鳴らす。だがその言葉は事実だった。感度を数十倍にも改造された肉体は憎い相手でも責められればあっさり絶頂するほど敏感になっている。

だが肉体改造の真の悪辣な点は、絶頂だけは許さない点にあった。どれほど快樂を感じても決してサグメは絶頂できないのだ。もちろん方法はある。男たちが持つクスリ。それがなければどれほど渴望しても女の悦びの頂点を味わうことはできない。

もはやサグメはクスリなしではまともに生活もできなくされていた。だがクスリを懇願し、クスリに屈するということは卑劣ならざるものたちに屈することと同義だ。

再び男の指がサグメの秘所に潜り込む、今度は三本。たまらずサグメは声を出してしまう。開いた唇を男が奪った。舌の上に乗せられた何かを反射的に嚥下してしまう。サグメは今自分が何をされたことを悟った。クスリをまた飲まされたのだ。

その効力はすぐに現れる。いままで「溜めて」きた絶頂が一気に噴き出していく。指でぐぢぐぢと掻き回されたあの甘い官能が強力な媚薬効果を上乗せした状態で数回分の絶頂として一気に、サグメの快樂神経に襲いかかった。

「いやあああっ、うああああああっ！ イッ、イクラッ！」

サグメの秘所からプシュツとはしたくない汁が噴き出す。

「へへへっ、いいねえ、いいねえ。それじゃあサグメ様も盛り上がってきたところで生本番と行きましようかあ！」

男がサグメの左脚を抱え込むと対面立位の形で肉棒をずぶりと挿入した。ずぶぶぶつと膣内に侵入した肉槍はピストンを開始する。

穢らわしい地上の男との生セックス。最後には膣内射精という穢れた終着点が待ち受ける行為すらも、快樂に飲まれ、絶頂を渴望するたサグメは拒むことすらもできなかつた……。



8000

サグメ 薬物欲しさに陵辱懇願（能力無効、薬物中毒重症化）

地下室に響くプイイーンと低い電動音に、はあっ、はああつと  
いう女の甘い喘ぎ声が混じる。無機質な機械音と甘い女の声、こ  
の部屋にはただ高低の二重奏だけが長時間響き続けていた。

調教と改造によりサグメはあのクスリなしではイケないように  
改造されていた。5分に1度は絶頂するという河童製の超強力パ  
イプであってもそれは変わりが無い。むしろ強力な分。より残酷  
だった。絶頂の代わりにあの絶頂寸前のお預けと焦燥感を、えん  
えんと味あわされることになったのだから。

「ヒヒヒ、そろそろイキたくなってきたんじゃないのか？」  
男の下卑た声が地下室に響き、サグメの頭の中で反響する。

イク。実のところここ数時間サグメは絶頂することしか考えて  
はいなかった。しかし、寸前で躊躇する。目の前の男が善意でそ  
れを言うはずがない。なにか裏があるはずだった。

「クスリと引換で一発やらせてくれよ。我慢ができなくてよお」  
取引しようや、と男は大きく膨らんだズボンを指差した。

取引、と考えれば理解はできた。確かにお互いにメリットがあ  
る行為。しかし額面通り信じていいものだろうか。サグメは考え  
込む。だがサグメの態度に男は焦れたようだ。

「なああああつ、おい、素直になれよおっ！　なあ！？」

男はサグメの秘所のパイプを掴むと、乱暴に思い切り掻き回す。  
「うあああああつ、ひいいいっ、おとおおおおおっ！」

サグメは情けない声で喘いだ。強力なパイプで刺激され続けて敏  
感になった秘所を強烈に刺激されれば、普通なら大きく絶頂して  
いただろう。だがクスリなしではイケない。焦燥感が強まる。

至近距離にある男の股間から発情したオスの精臭がツンと鼻腔

を刺激する。これ、これで蜜壺をズボズボしてもらえたら、思い  
つきりいくことができる。イキたい。もう我慢できない。

サグメは男の提案を受けた。薬漬けで正常な判断ができなくな  
っていたからだ。だが男は承諾だけでは満足しないらしい。

「オイオイ、なあに勘違いしてんだ？　淫乱まんこにちんぼ欲し  
いってんなら誠意つてもん見せるべきだよなあ、サグメ様よお？」

要するにサグメに自分からセックスを懇願しろと言っているのだ。  
どこまでも卑劣な男だとかそんな難しいことを考える余裕はサ  
グメの頭がない。もうこれ以上お預けは耐えられなかった。

「お願いしますっ！　この淫乱まんこにつ、イキたくてヨダレを  
垂らしているメス穴にどうかおチンポをハメてくださいっ！」

卑劣漢に卑語を叫び、サグメは恥も外聞もなく土下座した。

男は口の端を大きく釣り上げた。嗜虐心を満たされたようだが、  
そんなことはサグメにはどうでもよかった。イキたい、チンポを

ハメてほしいそれだけが思考のすべてを占めていた。

「オラッ、これがお前が欲しがっていたおクスリだぜえ」  
男は小瓶から一錠だけ。指で取り出したクスリを差し出す。

サグメはガツつくようにそこに舌を思い切り伸ばした。まあ遠  
慮するなよ、と男がサグメの頭を掴むと、小瓶ごと一気にサグメ  
の口に押し込んだ。無数の錠剤が一気にサグメの口に押し込まれ

る。慌てて吐き出したが、大半はすでに飲み込んでしまっている。  
その効果は一気に現れた。ブシュウウツツと噴水のように粘っこ

い愛液が秘裂から噴水のように噴き出す。絶頂したのだ。ピンク  
色の舌をでろりと突き出したサグメは強すぎる絶頂が意識を襲っ

たことで声もあげられず、ガクガクと震えている。  
「さあて、サグメ様あ。これから思う存分ハメてやつからよお」  
サグメの耳に死刑宣告のような男の声がぼんやりと聞こえた。





秋

権 娼婦売春中（屈服中毒）、売春中毒、被虐快樂依存症）

「権と申します。今日は、たっぷり可愛がってくださいね♡」

権は男の前で床に額を擦り付けるようにして挨拶をした。

媚びと甘えを含んだ声。屈服を表し、この場において男の圧倒的優位を確信させ、自分を望みのままに使って欲しいという表明。まさに一流の奴隷娼婦としての作法だった。

顔を上げた権は目ざとく男の膨らんだ股間をとらえた。

どうやら男は自分に欲情してくれたらしい。達成感と満足感で気分が高ぶる。それは奴隷娼婦として刻み込まれた感情だった。

四つん這いのまま男の足下に近づく。人のように歩くなど奴隷娼婦には許されないからだ。名前も知らない客の男の足下に跪く。白い肌際際立つ革製のゴツイ首輪がジャラリと音を立てた。

「立派なおちんぼに、まずは胸でご奉仕、させていただきますね」権は恭しく礼をすると、股座に顔を埋め、スンスンと鼻を鳴らす。

興奮した雄の香り。もう権は我慢ができなかった。失礼しますね、といって豊かな胸で男の肉槍を挟む。びくびくと脈動しているのがわかる。己で興奮してくれているのだ。

権は嬉しそうに笑った。マシユマロのような胸で奉仕を始めた。男が気持ち良さげに呻く。何度も揉み込み、挟み、優しく刺激する。胸の性感帯をさりげなく刺激することで自分も男とともに高ぶっていく。念入りに、丁寧に。男の顔が緩んでいくのがわかる。

あさましくピンク色の舌を長く突き出し、肉槍の先端、鈴口を刺激する。男の視線が自分の口に突き刺さるのを感じる。胸も良いが、口も味わいたい。劣情が言葉にせずとも伝わってくる。

「ふふふ、いいですよ。口で、ご奉仕差し上げます」

実際には嘘だった。目の前にある男の肉槍の性臭に権の方が先に

我慢ができなくなったのだ。

隠された願望の通り、主人の命令を受けて奉仕する。目当てのものを味わうことができた権は、熱心に男のものを舌と唇を使い口全体で奉仕する。ぐちゅぐちゅと肉棒にしゃぶりつくその様は、まさに牝犬だった。緩急をつけて、啄ばみ、吸い込み、舐めしゃぶる。男の興奮が高まるのを感じると奉仕を緩める。男の熱が冷めるのを感じると再び激しく奉仕する。

男の瞳が性的興奮により血走ったものになる。飢えた狼のようだ。権は上目遣いで様子を伺いながら上手く誘導できていると感じた。この分なら、もうすぐだろう。

焦らすような奉仕に我慢しきれなくなった男は権の頭をがっちり掴んだ。絹のような髪の毛がプチプチと何本かちぎれる。

オナホールを使うように男は権の頭を前後させ始めた。射精したい。この女の口の中になっぷりとプチまけてやりたい。焦らされたことで男は理性が飛びただ獣欲に突き動かされていた。

喉奥を何度も激しく突かれる。龟头や肉傘が粘膜をえぐり痛みを感じる。男の腰で顔を何度も張られる痛み。モノ扱いされ、射精のための肉オナホ同然として使われる屈辱。すべてが権の被虐願望を満たしてくれていた。プシャツと愛液が秘裂から吹き出す。

権の後頭部をがっちり掴むと男がさらにゴリゴリと奥まで肉槍をねじ込んだ。呼吸もままならず意識が遠のく。頭を掴まれたまま何度も何度も喉奥まで使われる。やがて男が呻く。来るのだ。

びゅるっ、ぶびゅるるっ。喉奥に男の熱い生命の滾りが注ぎ込まれていく。権は目を細め、されるがままに口内射精を受け止める。精液の濃厚な香りと生臭い味が権の衝動の枷を外していく。

もっと、もっと欲しい。口だけでなくおまんこも。チンポしごき穴として使って欲しい。精液が権の隷従願望を加速させていく。



秋

## 椀 娼婦売春中（重度の膣内射精中毒、被虐快樂依存症）

「あつ、はああ♡ このおちんぽつ、いいですつ、これえ♡」

肉壺で男の肉槍を味わいながら椀はトロけきった甘い声をあげる。腰を動かし、くねらせ、円を描くように尻を振る。男のよくエラの張った肉傘が蜜壺を挟りまわし甘い肉悦が湧き上がる。ジグソーパズルの欠けた最後のピースがハマったような充足感。

男の肉棒を肉穴にハマていただくセックスを椀は望みのままに腰を振りたくり貪っている。ゾクゾクと危険な痺れが背筋を走り抜ける。ペニスが抜ける寸前まで腰を上げ、一気に振り下ろす。

どぢゅんっ！という音が響いた。椀の顎が遠吠えをするように天を向く。口がだらしなく開き、赤い舌が突き出され、フルフルと震える。快樂が大きすぎて椀は声も出せない。勢いよく肉槍が己の膣奥に叩きつけられ、子宮を震わせたのだ。

膝から力が抜ける。全体重が男の肉槍と乙女の子宮口にかかる。自重によって子宮が歪に形を変えられていることをはっきりと自覚させられ、ただの一撃で絶頂に押し上げられた。

もはや動くこともできなかつた。手足が痺れ息もままならない。後悔するほどの快樂に椀は飲まれていた。だが男はそれでは満足しなかつた。椀の形の良い尻を平手で張ったのだ。

絶頂の余韻に浸っていた椀の顔が引き締まる。肉奴隷として殿方に満足いただけにいていないのに、精液を子宮に恵んでいただけにいていないのに惚けていた己を叱咤する。男を感じさせるために淫らに腰をくねらせ始めた。

腰を激しく上下させ、何度も飽くなき絶頂を迎え、椀は甘くトロけた嬌声をあげる。それでも腰を振り続ける。たとえ己が何度イッても男を満足させるまでは、椀が腰を止めることを男が許さ

ないからだ。ベッドの上で男と女の二つの影がリズムミカルに揺れる。射精を求め性的興奮がどこまでも高まっていく。

二人の動きの激しさはベッドが激しく軋む音が物語っていた。ギシギシという耳障りな音。ぶぢゅっ、ずぢゅっ、ぶぢゅんっ、というはしたない水音。官能のオーケストラの興奮の熱気が部屋には立ち込めていく。終わりのない重奏の音は大きさと激しさを増していった。

「イクッ、またあつ、あひっ、ああああ♡」

今までよりもずっと大きな絶頂の波が椀の意識を押し流していく。過去の疲労が一気に押し寄せ、椀は男の上に倒れ込んでしまう。あれから二度は精をいただいたが代わりに数え切れないほど女悦の頂へと押し上げられた。どつと絶頂の余韻と多幸感が押し寄せる。まだ肉を食りたい椀は願うがもう体は動かない。腰の奥で震える肉棒は、まだ俺は全く満足していないぞと訴えていた。

男が急に上体を起こし、椀をそのまま勢い良く押し倒す。いや男が腰を抱え込むようにしたこととて体をくの字に折った椀は愛液まみれのドロドロの秘貝を男の目の前に晒す姿勢になる。男が腰を引いた。ゆっくりと焦らすように。秘肉が擦られ甘い電流が椀の背筋に流れた。もはや動けない椀に容赦なく男は腰を落とした。ずぶぢゅっ！一気に振り下ろされたことで頭までペニスに串刺しにされたような刺激が脳天を襲う。何度も何度も男がズゴズゴと激しいストロークを繰り返す。頭がグラグラと揺れる。

こんなことを繰り返されたら快樂で頭が壊れてしまう。だが。男の体重で押さえつけられては逃れることなど不可能ではないか。

なにより子宮が、女の本能がこの杭打ちのような激しいプレスとその後に待ち受けるであろうクライマックス、種付けを渴望しているのだ。恐怖よりも期待に椀はぶるりと震えた。

貴方ね最近幻想郷の秩序を乱しているのは

困りますわね！少し痛い目をみて貰いますわ

まあまあところで紫様こちらを御覧ください

何の悪ふざけかしらこれは？

あー！♡

簡単に催眠にかかりやがってようやくこのスケベボディのものに出来たぜ

どっとうかしら♡ これで観念したかしらッ？あッ♡

ゆかりんのクソエロボディには俺のチンポも平伏しますよ

ズグッ

ズグッ♡

ズグッ

ズグッ

ズグッ

chin

ぐっ吸い付いてくる…ッ 乳揺らして 下品にアクメしろ！

ズグッ♡ ズグッ♡

あっはい…ッ♡

あッ♡

あッ♡

あッ♡

あッ♡

## 八雲紫 催眠済み調教（絶対服従、感度増大、屈服中毒）

白磁のようななめらかな肌と最高の彫刻家が全身全霊を持って掘り上げた大理石の彫像のごとき美。八雲紫という女への賛辞としてはそれも不足するだろう。極上の美を具現化した存在だった。その八雲紫が男とまぐわっていた。それは愛する男女同士が愛を確認するための睦み合い、そんなものでは断じてなかった。

卑猥な水着を身にまとい、壁に手をつき後ろから獣のように犯されている。豊かな胸が一突きごとにぶるんっ、ぶるんと揺れる。

「どっ、どうかしら？ あっ、これで観念したかしら？」

八雲紫は男に声をかける。その声には勝者の余裕があった。

膣壁を乱暴に抉られるたびに乳を震わせながら、あっ、ああっと甘い声で啼くその姿は明らかに尋常な態度ではなかった。だが紫はそこに違和感を全く感じていない。幻想郷の秩序を乱す男を退治している。そう信じて疑わなかった。

紫の蜜壺はヌチッヌチッと淫らな音を立てながら男の肉棒を虐待する。極上の肉が締め付け、うねり、シゴきたてていく。

「ええっ、ゆかりんのくそエロボディにはちんぽも平伏しますよ」男の声には嘲笑の響きがあった。はしたない水着を身につけ、壁に手をつき、ヌチッヌチッとほじくられるままに名前も知らぬ男に体を好きにさせている女が、観念などとは笑わせる。

だがそこに違和感を覚えない紫は勝ち誇ったように笑う。

紫の尻と男の下半身が勢いよくぶつかるたびに紫の形のよい胸がぶるんっ、と勢いよく揺れて男の目を楽しました。征服感が高ぶっていくのを感じた男は命令する。

「ぐうっ、いいぞ淫乱豚っ！ 乳揺らして下品にアクメしろッ！」モノ扱いする言葉に紫は性的興奮が爆発的に高まるのを感じた。

アクメしろと命令されたのだ。であれば幻想郷の管理者として、絶頂するのは当然のことだった。ズボズボという男の肉槍の動きによって膣壁の一つ一つを削り落とすかのような猛烈な快樂が増幅され、勢いよく脳を直撃する。

「おひいいイッ、おへっ、ああああッ！ イくっ、イグう！」情けない声をあげ戦慄く紫は、肉悦の頂を迎えたことを宣言する。

紫は背をピンと反らし、胸をばるんっ、と揺らしながら派手に絶頂した。吠えるような低い声は下品そのもので、紫の普段の強者故の傲慢な態度や威厳など欠片も残ってはいない。

最高の肉槍の絶頂の締め付けの心地よさに男の肉槍も限界を迎えた。もちろん我慢などしない。この極上の体に自分の遺伝子を流し込み、己の所有物に墮とすべく男はラストスパートに入った。

絶頂直後の敏感な蜜壺をゴリゴリと容赦なくほじくられ獣じみた喘ぎを漏らす紫に、男は精液を一気に紫の膣内に大量に注ぎ込む。もちろん流れ込む白濁汁の火傷しそうな感触に、先ほどの絶頂に酔いしれる紫が耐えられるわけがなかった。

「おへっ、せーえきいっ！ 反則うっ、はんそくだからあ！」

紫は下品に叫ぶとガクガクと痙攣し、再びさらに下品に絶頂した。ようやく絶頂の大波が収まったが、連続で絶頂したことで紫は三白眼になり、ぜえぜえと息を吐いている。その快樂にトロけた顔には知性の輝きはまったく残ってはいない。

オラッ、腰を止めてんじゃねえよ。淫乱豚らしく下品にケツを振れや。男の言葉で余韻に浸る紫はノロノロと腰を振り始める。

紫を言いなりにしたことを確信した男は邪悪に笑う。幻想郷のトップを言いなりにすれば芋づる式に他の女も釣れる。まずはあのお高くとまった藍とかいう女からだ。この幻想郷には美女がいくらでもいる。まだまだお楽しみはこれからだ。

答えてゆかりん♡

ゆかりんの愛しい  
恋人は誰かな？

あつ貴方様  
ですわ…♡

牛柄のエロ衣装  
似合ってるね

家畜みたいに  
沢山種付けして  
あげるからね♡

ズン

オイ！何勝手に  
アクメしてんだ！

chin

教えたとおり  
言えツ！

こつ恋人である  
貴方様のためにツ♡

ゆかりんの  
下品な交尾用  
ボデイで気持ちよく  
射精してください…♡

よく言えおした♡

おおおおおお  
おおおおおお  
おおおおおお

おほおほおほ  
おほおほおほ



## 八雲紫 催眠済み調教（絶対服従、催眠定着のため調教中）

幻想郷における最も荘厳な屋敷、八雲邸の主人の寝室。本来であればもつとも威厳があるその場所には男女の香りが充満していた。八雲紫は男の上で形のよい腰を懸命に振っている。

男のものは太く長く、それでいてエラが張った凶悪な形をしていた。膣内で擦れるたびに、それが女を狂わせ騷るための形をしていることを嫌という程知覚させられる。こいつで一突きされるたびに、自分が賢者から肉奴隷に作り変えられているのがわかる。

それでも紫は動きを止めることはない。それが幻想郷の管理者として当然の使命だからだ。男を喜ばせ満足させる。肉奴隷として目の前の男に服従する。主人を喜ばせることが当然の使命。そこになにも疑問に思うことはなかった。

「答えてゆかりん。ゆかりんの愛しい恋人は誰かな？」

男の問いかけに迷うことなく貴方様ですわ、と紫は答える。

迷う必要もない当然の問いだった。答えを聞いた男は満足げに胸を揉みしだき、膣肉を耕すように下から突き上げてくる。

紫は最も信頼し、愛する男に合わせて一層腰を振りたくる。弱い場所を自ら晒しゴリゴリと責められるとそれだけでイキそうになる。いや我慢する必要もないのだ。紫は甘い絶頂に身を委ねた。

「オイ変態マゾ豚の分際で！ 何勝手にアクメしてんだ！」

主人をおいて自分だけ一人で気持ちよくなるなど肉奴隷失格だ。眼前に迫る絶頂を必死に我慢する。それでも腰は止まらない。男の腰の動きと同調し理性がバキバキと音を立てて壊されるほどの快楽が襲う。フーッ♡フーッ♡と獣のような息を吐いて必死に紫は絶頂をこらえる。膣内のペニスが震える、射精が近いようだ。

「オラッ、マゾ便器！ 教えた通り言えっ！」

男に命じられ紫は叩き込まれた言葉を言おうとして立ち止まる。

違和感。この男が恋人？ そもそもなぜ自分がこの男とセックスなどしなければいけないのか。芽生えた違和感が膨らんでいく。しかしそれは長く続かなかつた。違和感が別の感覚に変わる。北極に裸で放り出されたような生命を脅かす不安。怖い、怖ろしい、不安から逃れるにはこの男に従うしかない。

「恋人であるっ、うう、貴方様のためにいっ♡」

舌の上で言葉が踊ると不安が去り、満たされた幸福感が全身を包み込んでいく。一体何を自分は疑っていたのか。愛する男に尽くし奉仕する。これが正しいのだ。

気持ちよくっ、射精してくださいっ♡ 紫は最後まで言い切ることができた。男は満足げによく言えましたっ、という溜まりに溜まった射精感を解き放つ。紫は何が起きたかわからなかった。一瞬遅れて快楽がやってくる。

「おへっ、おへえええっ！ イクッ、イッグウッ！」

まさに快楽の暴風。脳が白く灼けていくのがわかる。愛する男に膣内射精されただけで法外で規格外の絶頂に押し上げられた。

この男の言葉に従えば、この絶頂を何度も味わえる。女として至高の悦び。知ってしまったえばもう言いなりになるしかないではないか。紫はまともな状態であれば知ったことを後悔する禁断の果実の味を知ってしまった。覚えてしまった。

ガクガクと白い裸身を震わせながら、紫は快楽に屈し失神した。もちろん失神したくらいで男が止まるはずもない。下から突き上げ強制的に肉の騷を再開する。男が満足するまで紫は1日中たっぷり貪られ屋敷中に甘い悲鳴を響かせ続けた……



ケツ肉が邪魔  
すぎるわ

オオオオ

おわわ

なんでこんなに  
やらしく育っちゃったの

これで  
子宮まで届くでしょ

んんん

おちんちん

ググググ

オラツイったか!?  
受精したか?

イツイきましたあツ  
受精しましたっ♡

俺が交尾したい時は  
いつでも交尾させるか!?

ググググ

んんんんん

chain

さっささせて頂き  
ますうツ♡

おわわ

おはん

おん

おん

おん

おん

ぬる..

おん

ぬる..

ぬる..

おん

ぐふふ..  
これで肉付きのいい  
交尾用妖怪また  
一人GMだぜ

## 八雲紫 催眠済み洗脳調教（絶対服従、肉体陥落済み）

八雲邸の寢室、幻想郷の最高権威が体を休めるに足る最高級の布団の上に八雲紫はその白い裸身を横たえていた。ぜえぜえと荒い息を吐くその姿は疲労困憊という様子で、白い肌にはびっしりと甘い汗が珠となつて浮かんでいる。

一人寝をしているわけではない。むしろ男とまぐわっている真っ最中だった。男の精力はまさに底なしの絶倫で、八雲紫が体力の限界を超えてなおその肉を好き勝手に貪っている。

男は無遠慮にぐいと紫の尻肉を割り開く。茶色い窄まりと美味しそうに剛直を啜える秘唇が露わになる。絶頂を迎え枕に顔を押し付けてぜえぜえと喘ぐ紫の蜜壺をぐっぽぐっぽと太すぎる肉凶器がほじくり返すえげつない淫景がそこにあった。

「んおおおおおっ、またっ、またあっ！ ああっ、イぐう！」

紫は低い声で吠えると、白い裸身を大きく反らせて絶頂した。

精液や愛液、汗や様々な液体で布団はぐっしりと濡れているが男は気にすることもなく腰を振り続けている。紫は既に腰が抜けており逃れることもできずに男にされるがままになっていた。

「ほおおおっ、いいぞお、また膣内射精キメてやつからなあ！」

締め付けの心地よさに満足した男は今日何度目かの射精を行った。びゆくびゆくびゆくびゆくっ。セックスに溺れる紫の子宮めがけて新鮮な子種汁がビュルビュルと流れ込んでくる。

「イグイグイグッ！ あアー！ あああアー！ーっ♡」

紫は低く獣じみた声で吠え、一度で収まらず連続で絶頂を迎える。

神聖な場所が白濁マグマの熱で焼き尽くされる。常識や理性が跡形もなく溶け落ち、かわりに肉の悦びに置き換えられていく。紫は背筋をゾクゾクと震わせながら元には二度と元に戻れぬほど

の強烈な屈服の愉悅に身を震わせている。

それでも男は容赦しない。ぐぼっ、ずぼっ、ぐぼぼぼぼっ。肉を抉り、捻り、耕し、ほじくり倒す。女の穴を自分の肉棒の形に作り変え、隷属し所有される喜びを刻み込んでいく。女の明敏だった知性が弱り、剥き出しになった紫という人格の一番本質的な場所に、八雲紫という女の所有者が誰かを刻み込んでいくのだ。

「オラッ、肉便器、イッたか？ オレの特濃精液で受精したか？」

さらに何十度目かの絶頂の後の男の問いかけ。

もはや八雲紫に取り繕う余裕など全くこれっぽっちも残っていない。受精したかだと？ これほど精子を注ぎ込まれ、していないわけがない。二度と取れぬ精臭でマーキングされ尽くした子宮まで、肉体の全てがこの男の所有物に墮とされているのだ。

「イキましたあっ♡ プリップリのザーメンで受精しましたっ♡」

紫はトロットロに媚びた声で男の言葉をあっさり認めた。

女が持つオスへの隷属本能を徹底的に開発された紫には、嫌になる程快楽を与えられ、主人の子を孕ませていただく事こそ至高の喜びだった。気持ちいいこと、幸せなことをどうして拒む必要があるだろうか。男は嗤う。もうこれでこの女は終わりだ。

紫は男に言われるがままに、男が望むときにいつでも交尾することまで自分から誓った。肉便器だと誓ってからは紫の陥落は早かった。坂道を転げ落ちるように墮ちていく。紫は親友の幽々子が最近ダンジョンで催眠刻印を受けたこと。肉欲を持って余し、発散相手を紹介してくれるよう相談を受けたことをあっさり話した。

紫は男が命じた通りに幽々子に紹介すると誓った。この悪魔のような男に優々子を差し出せば、自分と同じ様に墮とされることを理解していながら。幻想郷を救いえる強力なカードがまた一枚失われることが決まった瞬間だった。

舌出せ：  
イチヤラブ交尾  
しよう♡

ねえ♡

わろい  
わろい

はっ♡

はっ♡

オラッ  
生意気クソ妖怪が！

オスの方が  
強いと分かったか！

グッ…  
奥まで射精する…ッ！

ザーメンで  
死ね！

chin

何か  
言うことはないか？

この下品な妖怪に  
種付けしていただき…

あっありがとう  
ございます…ッ♡



八雲紫 奴隷化完了（絶対服従、肉体および精神完全屈服済）

幻想郷でも最も豪壮な屋敷。その奥まった部屋である主人の寝室。そこにはむわっとした濃厚な男女の性臭が立ち込めている。

そこは真っ昼間から激しい男女の営みが行われていた。ヒキガエルのような男が女の上にのしかかり、体重全てで押し潰すようにしながら何度も何度もドスドスと執拗に女の肉を耕している。

女の姿はハッキリとはしないが男の下から覗く長い脚が快楽に耐えかねるように何度も跳ね上げ、ふうおおっ！という叫ぶような獣じみた声上がる。浅ましく淫らな痴態を晒しているのがこの館の女主人、八雲紫だということが見て取れた。

親の仇の腹に包丁を突き刺すときでもこれほど執拗で徹底的ではないだろう。男がドスドスと体重を乗せた重い抽送を振り下ろす度に紫は吠え狂い、乱れ、何度も絶頂する。しかし男はおかまいなしにさらにピストンを重ね、紫をセックスで追い詰めていく。

男の腰振りがより凶暴なものになった。紫に体全体で飛び込むような暴力的なストローク。紫が白目を剥き、優美な背が歪に反り返ろうとして、男の体重で押し潰された。紫はプレーキの壊れたダンプのように果てのない絶頂へと転がり落ちていく。

ついにくるのだ。膣内射精。女にとって至高の悦び。セックスの中でも最も美味しいところ。何度も絶頂を重ねた体でプリップリの子種汁を流し込まれれば、抵抗や常識を焼き尽くされ、代わりに隷属と服従を焼き付けられる。この男の肉奴隷に墮とされてしまう。その恐ろしい予感が紫を戦慄させる。

だが。それこそがいいのだ。この中年男に屈服し、何度もハメ潰されるまでプチ犯される。主人に隷属する都合の良い肉玩具に作り変えられる。女として至高の幸福を与えて頂けるというのに

なぜ躊躇うことなどあるだろうか。紫は自ら腰を動かし肉穴を締め付け、精液を恵んでいただくべく全霊で懸命に肉奉仕を行う。「おおおおっ、いいねえ、出すぞ生意気クソ妖怪がっ！」

ぶびゆるるっ、ぐびゆるるるうっ！ 中年男の凶暴な精液の濁流が八雲紫の女として最も神聖な場所に流れ込んでくる。

白いマグマの熱が八雲紫の脳から人格や尊厳という高尚なものを焼き尽くし、かわりに女を組み伏せるオスの強さと隷従の悦びを叩き込んでいく。死すら予感させる激烈さ。男の言う、チンポでハメ殺す、ザーメンで死ぬ、という言葉もモノの例えではない。

実際に大賢者八雲紫という女の脳がセックスによってプチプチと焼き切られ死に消えてゆく。後に残るのはこの中年男の所有物の肉オナホだけだ。紫が己を内側から焼き尽くす熱でたっぷりと絶頂を味あわされた後に、ようやく男は長い長い種付けを終えた。

男が息も絶え絶えの紫に問いかける。何か言うことはないのか？「こ、この下品な妖怪に種付けしていただき……」

射精絶頂に酔う紫は朦朧とする意識で必死に言葉を組み立てる。「あっ、ありがとうございます……♡」

八雲紫という幻想郷の管理者だった女は完全に屈服していた。紫の屈服。最初に頭を潰された段階でこの「異変」を解決する

勝算は大幅に失われていた。ましてやかつての頭が仲間を売ることに精を出しているとは。

大賢者八雲紫はその能力と役割故に幻想郷の女すべての状況を

知悉している。誰が淫らな烙印を得たか、誰に男をあてがえばあっさり墮ちるかまで。そして主人のため情報を有効に活用した。

幽々子に続き永琳、白蓮があっさりと陥落した。略奪者が管理人を籠絡済みなのだ。残った幻想郷の媚肉たちが捕食者の餌食になるのは時間の問題だった。

5496

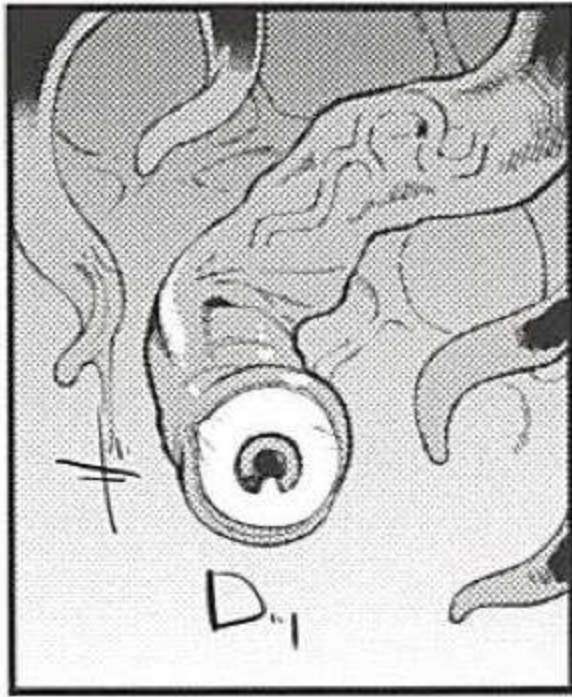
はなうな

お

お

1/1 — 2017





## 華扇 触手部屋監禁辱調教（洗脳発情媚薬で汚染済み）

目が覚めた時に最初に感じた違和感は、嗅覚に訴える生臭さだった。周囲には肉色の壁が広がる。手足は絡め取られており、精一杯力を込めれば引き抜けるかもしれない、という程度の力で押さえこまれている。

このダンジョンに鬼の腕なるアイテムがあるという怪しげな噂を聞いてやってきて……そしてこのザマという次第だった。

服もご丁寧に、布地の少ない破廉恥なものに着替えさせられている。華扇は、これが何者かのタチの悪いイタズラだと断じた。だから大きな声を出してその者に呼びかけることにした。

それが致命的な誤りだった。それに華扇が気付いたのはすべてが手遅れになってからだった。大きな声が、華扇の肉体に媚毒が回るのをじっくりと待っていた触手たちを目覚めさせた。

「聞いていますんでしよう？ 下らない悪戯はやめて私をーッ！？」華扇の無意味な問いかけは、ドチュツという秘所への、柔らかくも力強い触手の乱入によって強制的に遮られた。

華扇は我が身に起きた信じられない出来事に、首を動かして下を向く。欲を離れた仙人として守ってきたはずの華扇の貞操。それが生臭く奇妙に柔らかい生殖触手によってあっさり破られた。破瓜の激痛が華扇を襲う。そのはずだった。

だが肉体の反応は異なっていた。知らぬ間に十分に潤い、男のものを期待して自らほぐれていた媚肉は触手を美味しそうに啜え込んでみせた。人の脳というものは化学物質により動きが決まる。似た形のものであれば脳はそれを取り違えることもある。

快樂、催淫、従属。触手は脳がそう捉える筈の化学物質をたっぷり含んだ体液を作ることができるとこの洞窟の捕食生物だった。

触手は女を都合の良い肉穴に作り変えるために分泌体液を使う。

今も華扇の柔肌にたっぷり粘液をなすりつけるブラシ触手や華扇の呼吸器官を犯す気化した体液、そして内側から蜜壺の粘膜にたっぷり分泌液を擦り付ける触手たちは華扇の脳に汚染物質を染み込ませるべく執念じみた執拗さで作業を続けている。

華扇は気付かぬまますでに手遅れなほど大量の粘液を摂取していた。柔らかな蜜壺の感触から獲物の下ごしらえが終わっていることを確信した触手たちは、責め方を小手調べから女を狂わせるための本腰を入れたものに切り替えた。

ゴチュツ、グチュウツ、グブツッ！ グチイ、チュブブウツ！蜜壺を抉っていた触手が勢いよく、男の味を知らなかった華扇の神聖な場所を蹂躪していく。あひいッ、と華扇は情けない声をあげた。嫌悪感を感じるべき醜悪な触手肉塊の動きに、下半身が蕩けるような快樂を感じてしまったからだ。

本来であれば愛する男と子を成すために交わるはずの場所は、触手によって快樂の味を容赦なく覚えさせられ、そこに至福の喜びを見出していた。華扇の脳内に染み込んだ触手由来の偽りの感情が、触手とのセックスを良いもの、受け入れるべきものとして華扇の肉体に、感情に認識させる。

もちろん触手が責めるのは前の穴だけではない。華扇が動かぬ四肢をジタバタともがかせ、なんとか逃れようとしている隙に無防備な尻穴に細身のドリル状の触手が静かに迫りつつあった。ずいゆううっ。突然の尻穴への乱入者に、華扇の動きが止まる。

「うひいっ！？」そこっ、そこはああああっ！？」華扇は顎を跳ね上げ、拘束された限界まで背筋をを反らした。

本来であれば一方通行のはずの背徳の門は脳からの偽りの指令によって緩み、直腸性交が可能なほどにほぐれていた。

固く閉ざされるべき後門は、肉色の先端がこじ開けることを止めようとしめない。直腸へと潜り込んだ細い触手はぐにぐにと蛇のように身をよじらせ周囲を揉み解しながら奥へ奥へと突き進む。華扇の背筋に悪寒が走る。嫌悪感と強烈な異物感が華扇を襲う、そのはずだった。だがそれらは不自然に霧散し、かわりに背徳穴独特の甘く腐ったような後ろ暗い喜びが華扇の頭を支配していく。

前後の穴をおぞましい触手たちにほじくられている。そのはずなのに、華扇は拒否感めいた感情を全く感じなかった。それどころか愛する男にするように、触手にその身を委ねることが自然に感じられる。ぐちぐちと全身の穴をほじくる触手たちに、華扇は根拠のない信頼感すらも覚えていた。

「あつ、だめっ、そんなのっ！ あひいい、だめなのにいっ！」  
触手に半ば身を預け、委ねていた華扇は少し慌てた声を上げた。前の穴にもう一本、触手が俺もいれろと秘裂を押し広げ、先端を潜り込ませたのだ。華扇がなんの抵抗もせぬままそれを見ていと、さらにもう一本ずつ秘穴と菊門に蹂躪触手が数を増やした。増えた乱入者たちはそれぞれ思い思いに華扇の穴を押し広げ、撫でさすり、掘削し、内側から愛撫した。人間の指でもこれほど自由には動けないであろう巧みな快感を掘り起こす動き。窮屈な穴にメリメリという音が聞こえるが華扇は腰を甘く震わせる。

「くうううっ、だめっ、だめだからっ、広げすぎい……ッ」  
だが鈍らされた危機感が全力で警鐘を鳴らす音が、ぼんやりとしていた華扇の理性もようやく聞こえたようだ。

このままではいけない。一体なぜ自分はこれほどまでに気色悪い触手に身を委ねていたのか。そう考えた華扇は四肢に力を込め、この場から逃げ出そうとする。歯を食いしばり、全身に力を込める。ゆっくり、ゆっくりと手足が、飲み込んでいた触手の中から

抜け出そうとしていた。

しかしプチプチと押さえつける触手たちが千切れる音を聞いた華扇は躊躇する。なぜだか、この触手たちを傷つけてはいけない気がしたのだ。一方触手たちの反応は素早かった。華扇の穴を責めていた触手たちが一気に激しく蠢き始める。

「ひいっ、ひいひいっ！？ こんなっ、反則ううっ！」  
性感帯を思いつきり刺激された華扇の四肢から力が萎える。

腰が、ガクウンと音が聞こえるほど跳ねた。ゴシゴシとナカから擦りあげられ、吸盤触手でプチプチと吸い立てられる。華扇の顎が大きく上がり、白い喉が晒される。華扇が感じていることはビクビクと蛇のようにうねる腹筋からも明らかだ。

快楽を特盛で流し込まれた華扇が無様にビクビクと痙攣するその隙について半ば抜けかけていた手足に太く力強い触手が巻きつく。もう逃がさないぞ、とその触手は語っているようだった。

それで終わりではない。こいつは他の女とは違う。徹底的に潰さねばと触手は考えたようだ。表面をびっしりとブラシ状のヒダで覆われた触手が華扇の陰核と乳首に近づく。うねうねと動くそれらが三つの突起にしゃぶりついた。

「ひいひいっ、これっ、こんなのおっ、おへえええっ！」  
華扇の腰がその破壊力を物語るように、カクカクと卑猥なダンスを踊る。だがそれでも触手たちは容赦しない。

「アひいっ、おへっ、オヘアああっ！ おおああアアッ！」  
汗だくになり、髪を振り乱しながら意味をなさない言葉を叫ぶ華扇の様子はまるで狂人だ。いや彼女は実際に快樂で狂っていた。

地下室に響く華扇の悲鳴に意味ある言葉が急速と消えていく。華扇という獲物が完全に屈服するまで、徹底的にハメ潰すまで触手ゆえの執拗で徹底的な責め苦は終わりなく続いた。





クッ

グッ

グッ

グッ

グッ

グッ

グッ

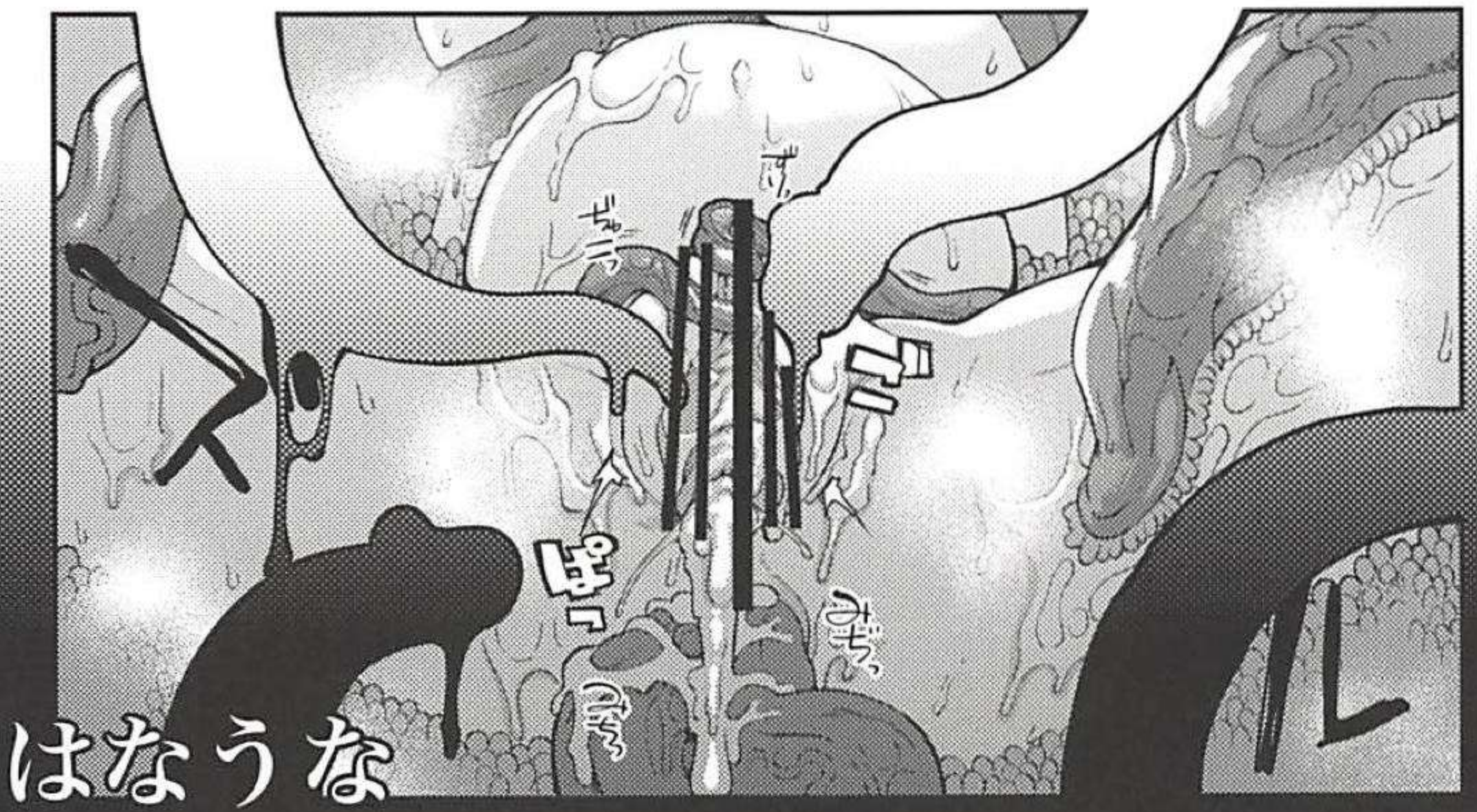
グッ

グッ

グッ

グッ

グッ



## 華扇 触手苗床改造調教（全身性感帯、極度の触手中毒）

華扇を責める触手たちの責めは決して華扇を休めることなく日夜を分かたず責め続けていた。すでに全身の穴という穴、性感帯の全ては完全に快楽を感じるためだけに作り替えられている。

媚薬原液、開発済み性感帯、そして休みのない責めに華扇が未だ屈していないのは、ひとえに彼女の強靱な精神力と頑健な肉体故に他ならない。他の女であればとっくの昔に狂っていただろう。

それでも触手は執拗に華扇を責める。膣内でえぐり、ひねり、吸い付き、押し拡げる。これほどまでに肉の耕し方に種類があったのかと思えるほど多彩な責めで華扇を追い詰めていく。

ドストスと杭打ちのように膣奥を叩き子宮を震わせながら、膣壁に吸いついた触手たちはチュウチュウと袋の一つ一つに吸い付き、優しく舐めしゃぶりながら、おぞましいほどの快楽を女の脳に嫌という程送り込んでいく。

それは人間には到底不可能な性交快楽の極致だった。それらが際限なく許容限度を超えて華扇の脳へと送り込まれる。仙女の脳の思考回路がブチブチと音を立てて壊れていく。ピクピクと痙攣する背中の筋肉がハッキリと分かるほどの絶頂を華扇は迎えた。

並の人間ならあつという間に廃人になるほどの快楽が絶えず華扇の蜜壺に叩き込まれていた。もちろん責め手は一つではない。

直腸を責める触手はより悪辣だった。潤滑剤代わりの媚薬分泌液をべちゃべちゃと塗り広げながら、肛腸の感覚全てを後ろ暗い淫らな背徳快楽で埋め潰していく。

華扇の直腸のどれほど細い隙間であっても細い触手が潜り込みそこを押し拡げる。優しくくつろげた場所に後から大量の触手たちが殺到しそこを我が物顔で蹂躪していく。快楽を塗り込み、そ

こを消化器官ではなく快楽器官へと容赦なく作り変えていく。

S字結腸を突破すればあとはあつけないものだった。大腸をめぐりめりと押し広げ、小腸をずぶずぶとほじくり手懐ける。抵抗できるはずもない体内を触手は荒々しく掘削し、優しく快楽を植え付け、自分たちに都合の良い肉穴として手懐ける。

子宮という行き止まりがない分、肛門穴こそ触手にとっては開拓のしがいがあるようだった。腹全体がみっちり埋まっている感触。二度と戻れなくなるほどの激しい快楽によって華扇はそこに、危険な充足感と満たされた思いを覚え始めている。

「おごっ、ほおおっ！ おへっ、おへええっ！」  
喉が触手に塞がれているために華扇は呼吸もままならない。

喉奥まで手加減なしに貫き、どぶどぶと怪しげな媚薬分泌液を直接胃袋に流し込んでいる口を責める触手と、下から貫いた触手によって華扇は自分の体の中が一本の丸い肉筒でつながっていることを否応なく自身の体で華扇は思い知らされた。

「おごおっ、ほああああっ！ おおおっ、うあああああ！」  
腹がポコリと膨らみ中からメリッ、ゴリュッ、ズゴスンッと掘削工事をするかのような恐ろしい音が響く。

触手たちは多くの雌費を貪ってきた経験からこの肉餌の限界がどこにあるかを目ざとく見つけることができる。このメスは随分過激にやつてもよいらしいとアタリをつけているようだった。

華扇の全身をついに貫通したことで触手たちはさらに激しく動き始める。グリグリと抉り、ずぶぶつと回転し、ちゅぼちゅぼと吸いたてる。一本が激しく動くだけでも激しい快楽を引き起こす。それを全ての穴で何本もの触手が同時に動き、掻き回し、攪拌していく。それら全ては許容限度を超えた快楽の濁流となり、一気に華扇の脳に流れ込み彼女を容赦なく絶頂に押し上げた。

全身で好き勝手に動き回りほじくり回す触手によって、華扇は幾度も幾度も絶頂を迎えさせられる。ようやく絶頂が終わると思えば、次の快樂電流が脳に流し込まれ、新たな法悦により、前の絶頂から降りてくる前に、さらに次の高みに押し上げられる。

「ほおおおおおおつ、おおおつ！ おへえええええええ！」

華扇は獣じみた声を上げて咆哮し、手足を感電したかのように激しくビクビクと痙攣させる。もはや女として限界な事は明らかだ。

だがブラシ状の触手は容赦しない。四肢すらもがちりと拘束し、押さえつけながら愛撫を加える。幾万本もの舌で愛撫されるような甘い感触が背筋にもたらされ、華扇の脳に快樂物質を送り込む。唯一拘束されていない乳房だけが華扇が絶頂に震え、激しくのけぞるたびに勢いよくぶるんつといやらしく動いていた。

蜜壺、肛腸、胸、陰核という華扇の肉体のありとあらゆる性感帯が快樂の味を覚えさせられ、絶頂を重ねることで触手にとって都合の良いものに作り替えられていく。快樂を感じ絶頂に上りつめるたび、脳の中でドバドバととめどなく放出されるドーパミンが華扇の脳を快樂物質漬けにしていく。

それどころか茨木華扇という女の根幹を成している脳そのものをここまで快樂漬けにすることで触手なしの生活には二度と戻れぬように、触手に都合がよいように改造しているのだ。

「ほおおおおつ、おへえつ！ もおお、ゆるひてええええつ！」  
思考をバラバラにされ、肉体の自由も一切を許されないまま快樂漬けにされる。このままではこの触手に殺される。本能的な恐怖感に戦慄する華扇は、下等生物たる触手に哀願すらした。

だがもちろん触手が許すはずもない。一切の抵抗も自由もないまま華扇はただただ女の肉の悦びだけを極めさせられる。主体性、選択肢、決定権。茨木華扇という一人の女を構成する要素を全て

触手は破壊し、焼き尽くし、奪い取る。かわりに肉奴隷、穴玩具、牝苗床として触手の家畜になるべく華扇を徹底的に舐けていく。

あれからどれだけの時間が経過したか、華扇にはわからなかった。一年は経っている様にも思えるし、もっと短いかもしれない。

壁がびっしりと触手で埋め尽くされた部屋で半ば華扇は壁に埋まるようにして拘束されている。四肢は肉壁に埋まりもはや感覚もない。あるいは肉壁に同化しているかもしれない。

壁からは華扇の顔と体のみが露出しており、華扇の媚肉には何本もの触手がまとわりついている。触手たちはみな女を啼き狂わせる凶悪な形状をしていた。

華扇の乳首や陰核は痛々しいほど勃起しており、もともと豊かだった胸はふた回り以上大きくなっている。たつぷりと触手精液を流し込まれた腹は妊婦のように膨らんでおり、その体が触手専用の孕み袋に作り替えられたことをハッキリと物語っていた。

ぐぼんっ、という重い水音と共に華扇の食道にまで押し込まれていた極太触手が引き抜かれた。栄養補給と発情媚薬投与も兼ねた極濃精液を流し込んでいた触手が引き抜かれた口から、華扇はひどく生臭い息を吐き出している。

「うああ…… た、たしゅけてええ…… だれかああ……」

もはやその瞳に、かつての意志の強さと知性を感じさせる輝きはなく、発情シトロけかけた表情から彼女が肉人形に完全に墮とされる寸前であることを察することができるだろう。

華扇は結局救出されなかった。寿命で死ぬこともできないまま、このダンジョンで女を壊す触手たちを新たに生み出すための苗床として生きることになるだろう。魔力に優れた彼女の腹からは女を狩ることに優れた優秀な触手が産み出され続けている。

## ■ あとがき

このたびは幻想ダンジョン敗北エロ合同をお手に取っていただきありがとうございます。タイトルにエロトラップを入れるかどうか非常に悩み、最終的に外しました。前回の幻想調教売春合同にくらべて分量が50%程度増えています。どうりでスケジュールが死ぬわけですね。HA-HA-HA。制作費も3桁万円を超えて私の家計も無事に死亡しました。感想歓迎です。あれは本当に嬉しいものです。ぜひ私やイラストレーターさん宛にどうぞ。

## ■ 奥付

幻想ダンジョン敗北エロ合同誌  
東方Project二次創作

原作：上海アリス幻樂團様

印刷：有限会社ねこのしっぽ様

発行日：2018年5月6日

発行：

サークル：幻灯摩天楼

発行者名：幻灯

連絡先：gen10.maten@gmail.com

pixiv ID：16459871

twitter ID：@gentoumaten

# 幻灯摩天楼

## 東方 Project Fanbook

淫らで秘裂な畏。容赦のない陵辱  
美しい女たちは肉贅へと堕ちゆく



合計21名の豪華執筆陣(敬称略)

背徳漢、chin、秋、にゆう、やむっ  
瀬上大輔、はなうな、ぽし、miya9  
是乃、西寅、三割引、キャンベル議長  
8000、うがつまつき、青ばなな、平  
flanvia、けん、パンダイン、やまいそ